

光を踏んで走りはじめた

波田野 淳紘

登場人物

一幕より

東山時恵（ひがしやまときえ）

西門悠里（にしかどゆうり）

北斗菜々緒（ほくと ななお）

小熊光子（こぐま ひかりこ）

松本幹生（まつもと みきお）

梅田香枝（うめだ かえ）

桜丘友樹（さくらおかともき）

杉谷葉子（すぎたに ようこ）

三谷拓二（みたに たくじ）

四宮百合（しのみや ゆり）

二反田一穂（にたんだ いちほ）

船見ワタル（ふねみ わたる）

島貫和砂（しまぬきかずさ）

岸边風佳（きしべふうか）

波江岬（なみえみさき）

二幕より

蟹江みどり（かにえみどり）

山羊沢鉄平（やぎさわてっぺい）

霧崎静（きりさきせい）

雨ヶ谷舞（あまがやまい）

雪村明（ゆきむらめい）

雷音寺階（らいおんじかい）

嵐山類（あらしやまるい）

*

机といすが並び、落ち葉が散らばり、人が散在する空間。

そこは教室でもあり、中庭でもあり、路上でも、森でも、都市でもある。

第一幕

1

教室。東山時恵が本を読んでいる。

その後ろの席で、西門悠里が時恵の背をぼうっと眺めている。

悠里が手を二度、パンパンと打つ。

時恵 何？

悠里 ……何か感じた？

時恵 何？

悠里 感じなかった？

時恵 何を？

悠里 ……こう、もわぁんと、何か。

時恵 腹は減っているが。

悠里 念を送っていたの、こっちを向けて。

時恵 こわ。何？

悠里 それだけ。

時恵 ……。

時恵、机に向き直る。悠里が手を三度、パンパンパンと打つ。

悠里 西門悠里の。

時恵 ……。

悠里 西門悠里の、お悩み相談の時間です。

時恵 ……。

悠里 えー、お父さんがよその女と親密になって、家庭が崩壊したっていう。あ、これわたしの話なんですけど、西門の。

時恵 (ふり向く) は？

悠里 相手の人、お姉ちゃんと同じ年でき。それだけでもやべえのにさ。

時恵 待って、何？

悠里 お父さんがさ。やらかしてさ。よその女とさ。

時恵 よその女？ 誰？

悠里 本日のゲストは東山時恵さんです。よろしくお願いします。

時恵 え、おまえの姉ちゃん年いくつ？

悠里 5個上です。

時恵 5個。……5個上の女とおまえの父ちゃん、やらかしたの？

悠里 やらかしたのよ。そのうえで、捨てられたのよ。

時恵 ドタマいかれてんじゃん。

悠里 人間ってやばすぎない？

時恵 やばいの、おまえの父親じゃね？

悠里 いや、父親はやばいんだけどさ。それはそうとして、人間ってやばいなって、思わざるを得ない。

時恵 主語でかくない？

悠里 どういう気持ちで、どういう顔をして、その女と一緒にいたんだろうって思っ

時恵 え、その想像力、一旦封印しない？

悠里 いやもうとめどなく、ドクドクと、したたる血液のように湧きあがる。

時恵 待つて待つて、やめよう悠里、楽しいこと考えよう？ じゃがりこ食べよう？

悠里 肉袋なんだなって、人間って。

時恵 悠里。悠里。

悠里 死にたくて。

時恵 悠里。

悠里 お父さん、いつも、日曜にバイクの後ろ乗せてくれて、あんまり怒らなくて、優しい人で、わたしの夢、応援してくれて。そういう人でもそういうやばいものを炸裂させるわけで。

時恵 悠里。

悠里 つまり、わたしもやばいのではないか？

時恵 いやおまえ関係なくない？

悠里 いや！ もう、わからない、わたしには、わからないよ、なんなんだよ、何を考えているんだ、わた

しは。何をだ。

時恵 落ち着けよ。

悠里 何を考えているのかな。わかんないよ。

時恵 自分が何を考えているか、そんなのみんなわかんないよ。

悠里 あんたの彼氏、いるだろう、野球部の。

時恵 南くん？

悠里 南だかなんだか知らないけど、野球部にしては繊細な指先の、ピアニストと見まごうばかりのかぼそい指先のあの男だよ。

時恵 それがどうしたんだよ。

悠里 わたしはピクリともあいつに心を動かされないが、でも、あいつの頭皮は嗅ぎたいんだ。

時恵 ちょっと待て。

悠里 嗅ぎ倒したい。

時恵 おまえ！ 何言ってるの？

悠里 いがぐり頭にしてさ、汗できらめく頭皮をぐわってつかんでじよりじよりって、じよりじよりって、毛先の一本一本に水滴がさ、光る玉の、新鮮な汗のしずくがきらめいて、お星さまのようで、弾き飛ばせば光のシャワーだ！

時恵 わたしは何を聞かされてるの？

悠里 すました顔して。光のシャワーを浴びたくはないのか。

時恵 光じゃねえよ、汗だよ。

悠里 余裕ぶつかましてんじゃねえぞ。

時恵 どうなってるんだよ、おまえの思考。

悠里 わたしだって無垢じゃいられないわけだよ、純真なだけじゃないよ。

時恵 わたしだって無傷じゃいらねえよ、おまえの性癖聞かされてよ。

悠里 人間ってやばすぎない？

時恵 やばいのおまえじゃない？ 西門家じゃない？

悠里 どうせ肉袋だよ、わたしたちや。

時恵 くくってんじゃねえぞ。

悠里 素直になれよ。けものになれよ。

時恵 はあ？

悠里 わたしはやばいのか？

時恵 わからなくなってきました。

悠里 空の青さが目に染みる。

沈黙。

時恵 おまえの夢、なんなの。

悠里 お嫁さん。

時恵 死ね。

中庭。曇天。

仁王立ちで立つ小熊光子。

トングとバケツを手に持つ北斗菜々緒。

北斗 中庭の掃除といっても、落ち葉を拾うだけだね。

小熊 そうですね。

北斗 蟹江さんと、山羊沢くんが来る前に終わりそうだね。

小熊 あの二人は来ません。

北斗 どうして？

小熊 来なくていいと伝えました。

北斗 そうなんだ。

小熊 はい。

北斗がもくもくとトングで落ち葉を拾う。小熊がそのさまを見ている。

北斗 小熊さん。

小熊 はい。

北斗 手を動かして。

小熊 聞かないのですか？

北斗 うん？

小熊 どうして二人に来なくていいと伝えたか。

北斗 ああ、どうして？

小熊 お話したいことがあります。二人で。

北斗 いいよ。

小熊 北斗くんはわたしのこと、ばかにしていますか？

北斗 僕が？

小熊 ばかにしていますか？

北斗 (首をふり) まったく。

小熊 どうして？

北斗 え、何を聞かれているの？

小熊 ……わたしは頭がかたくて、融通が利かないとよく言われます。

北斗 誰から？

小熊 母から。でも、一生懸命生きています。至らない点はご容赦願います。始めます。

北斗 ん？

小熊 現代文の時間。北斗くんだけが拍手をした。なぜですか。

北斗 ……それ、二週間くらい前のやつ？

小熊 ええ。二週間ほど前のことです。わたしの発表が終わったとき、静まり返った教室に、北斗くんの拍手の音が響きました。死にたかった。

北斗 なんで？

小熊 わたしが聞いているんです。どうして拍手を？

北斗 小熊さんの発表が素敵だったから。

小熊 意味がわからない。

北斗 は？

小熊 哀れみですか。

北斗 違う。

小熊 面と向かって問われたら、違うとしか言えないでしょうね。

北斗 だめだったのかな、拍手。

小熊 わたしは現代文が苦手です。敵です。滅びればよいと思っています。わたしの発表は実際、惨憺たるありさまでした。それはよくわかっています。あんなもの、小説の解釈にも、何にもなっていない。駄文。

ごみ。どぶの文章。

北斗 でも、小熊さんの使う言葉は、とてもきれいだった。響きがきれいで、りんとしていた。

小熊 おおあほうが！

北斗 え。

小熊 大阿呆なこと、言わないで。わたしの使う言葉なんておがくずです。ぬめぬめとして、妙ちきりんな、

排水溝にたまったへどろのようなものです。

北斗　でも。

小熊　でももへちまもない。

沈黙。

小熊　北斗くんは成績が優秀でしょう？　何をやってもそつなくこなすでしょう？　とても涼しい顔をして、勉強も運動も軽やかに乗りこなしています。そうじゃない人間もいるんです。人の何倍もがんばって、ようやく人並みを保てるような人間もいるんです。一生懸命やっているんです。もうからかわないでください。言いたいことはそれだけです。さようなら。

北斗　掃除は？

小熊　掃除？　ええ。しますけど！

沈黙。

北斗　小熊さんは誤解している。何にも軽やかじゃない、僕は。

小熊　……。

北斗　小熊さんのほうが軽やかで、完璧で、特別な人だと思っていた。

小熊　……。

北斗 会話をしてもいい？

小熊 いやです。

北斗 どうして？

小熊 わたし、人が苦手なんです。何を考えているか分からないから。

北斗 そのために言葉があるんでしょう？

小熊 言葉は嫌いです。言葉には言葉以外のものがまとわりつくでしょう？ 北斗くんが「特別」と口にし

ても、そこには「特別」以外のさまざまの意味が付着します。この女めんどくさいから話合わせておこうとか。この女めんどくさいから消えればいいのとか。めんどくさいから、早く帰りたいとか。

北斗 そんなこと思っていないけど。

小熊 使った本人さえ思いもよらないふう言葉は揺らぎます。そんな不正確なものを、いったいわたしたちにどうやって正しく使うことができるでしょう？

北斗 考えすぎじゃない？

小熊 言葉がみんな、数字だったらいいのに。

北斗 数字。

小熊 1が1で、2が2である世界。それ以外の何ものでもなく。

北斗 でも、1は小熊さんが今朝飲んだコーヒーの数かもしれないし、2はいま校内にいる野良猫の数かもしれない。

小熊 コーヒーは飲みません。

北斗 小熊さんはコーヒーを飲まない。

小熊 眠れなくなるから。

北斗 小熊さんはコーヒーを飲むと眠れない。

小熊 ばかにしていますか？

北斗 いいえ。

小熊 1は1です。2は2です。それ以外の何ものでも……、

北斗 (さえぎり) 1は小熊さんの枝毛の本数かもしれないし、鼻の下にあるほくろの数かもしれない。

小熊 (鼻を覆い) ほくろ？

北斗 2は小熊さんが古典の時間にもらった練習プリントの枚数かもしれないし、ポケットに忍ばせている髪留めのスピアの数かもしれない。7は小熊さんと僕がお話した回数かもしれないし、118は朝の駅で僕が小熊さんを見かけた数かもしれない。

小熊 変態。やめて。見ないで。なんなの？

北斗 ごめんね。自分でも何言ってるんだらうって思った。

小熊 よくわかりました。わたしなんか、議論の相手にもならないっていうことですね。わたしなんか！

北斗 そういうことじゃねえよ。

小熊 乱暴な物言い！

北斗 ……小熊さんは室内楽部？

小熊 悪い？

北斗 何も。楽器は何？

小熊 フルート。

北斗 似合うね。

小熊 それがわからない。似合うとは何？

北斗 僕にもわからない。そう感じるだけ。

小熊 それは北斗くんの勝手なイメージの投影でしょう？

北斗 そうだね。

小熊 北斗くんともあろうものが、そんな曖昧な言葉の使い方をしないでください。

北斗 僕が僕の抱くイメージを、僕の感じたこととしてきみに話しているのだから、間違っ
てはいないと思
う。

小熊 何を言っているんですか？

北斗 あれ、すれ違い？

小熊 あなた、どうして、わたしの部活を知っているのか？

北斗 自己紹介のとき、言ってたから。

小熊 忘れてよ、そんなの。四月の話でしょう？ 覚えてるのおかしい、絶対。

北斗 ……。

小熊 ……。

北斗 小熊さんは少し。

小熊 少し？

北斗 ……いや、何だろう。

小熊 わからずや、って言いたいのか？

北斗 お母さんにそう言われているの？

小熊 そうだけど。

北斗 小熊さんは、世界が好き？

小熊 世界？

北斗 この世界をどう思っている？

小熊 不用意ですね、その言葉は。北斗くん。あなたの言う世界は、何を指し示しているの？

北斗 世界は世界だよ、小熊さん。

小熊 あなたは世界をどう定義するの？

北斗 それは別の誰かにまかせよう。

小熊 わたしは北斗くんと話をしているのだけど。

北斗 夏の日差しや、草の香りや、風の湿り気で構成されているものだよ。

小熊 そんなの、野良猫の世界でしょうが。

北斗 それじゃいけない？

小熊 人間ですから、わたしは。

北斗 人間だって、猫的な側面があるよ。

小熊 屁理屈です、そんなの。

北斗 ねえ、小熊さん。たまには定義抜きで言葉を扱いたいものじゃないか。

小熊 定義がないということは、足場もないということですよ、そんなふわふわした場所で言葉を積み重ね

ても、実りのある議論はできません。

北斗 それでもいいよ。

小熊 よくない。

北斗 大丈夫だよ。

小熊 何が。大丈夫とは？ 何が、何について？

北斗 語ろうよ、ぼくは思う、だけを足場にして。

小熊 ぼくは思う？

北斗 ぼくは思う、言葉はもともと、この世界に力を与えるために生まれたものなんだって。だってそうじゃないか、なぜ僕たちは言葉を必要とするんだ？ 無力な、泣くほかにないけものが、どうして言葉を生み出せたんだ？ もうひとつの無力な、泣くほかにないけものに、力を与えるためだろう？ 目の前の世界に、きみたちはそれでいいって、おまえはそこで震えていろって、優しく励ますために、言葉があるんだらう？

小熊 北斗くんはやっぱりばかにしているんです、わたしのこと。

北斗 してないよ、ばかだな。

小熊 ほら！

北斗 ばかだよ。

小熊 ばかにしている！

北斗 してないよ。本当にばかだな。

小熊 ひどい。

北斗 きみはばかだよ。

花壇。花に水やりをしている松本幹生。

傍らでそれを眺める梅田香枝。

梅田　きれいだね。

松本　うん。

梅田　園芸部だったんだ、松本くん。

松本　うん。

梅田　誰がこの花の手入れしているのかな、って思ってたの。

松本　うん。

梅田　きれいだね。

松本　うん。

梅田　園芸部だったんだね、松本くん。

松本　……うん。

梅田　誰がこの花を手入れしているんだろって、思ってた。

松本　……。

梅田　きれいだね。

松本 梅田さん、何してるの？

梅田 待ってるの。

松本 何を。

梅田 一緒に帰る人。通り魔とかいるでしょ、近頃。ひとりだと、ちよつとね。

松本 ……ごめん、僕、今日は寄るところがあるから。

梅田 松本くんじゃないけど。

松本 え？ ああ。……うん。

梅田 松本くんは大丈夫？ いっしょに帰る？

松本 いや。いいよ。

梅田 いいの？

松本 いい。

梅田 きれいだね。

松本 ……。

梅田 きつと、この花の手入れをしている人は、優しいひとだと思った。

松本 梅田さん。おれみたいなくずと関わらない方がいいよ。

梅田 くず。

松本 (うなずき) くず。

梅田 松本くん、くずなの？

松本 そうだよ。

梅田 女の子を泣かしているの？

松本 ちがうよ。

梅田 自分より十も二十も年の離れた女の子に手を出してるの？

松本 は？

梅田 恥ずかしい写真を撮って、言うことを聞かせてるの？

松本 何言ってるの？

梅田 ゆっくりと相手の常識を壊して、逆らったらいけないという刷り込みとか、逃げてもむだだという無力感を覚えさせるのが得意なの？

松本 梅田さん？

梅田 死ねばいいのに。

松本 そんなことはしないよ。

梅田 え、お年寄りを騙してお金をもらってるの？

松本 まさか。

梅田 小学生のお小遣いを巻き上げてるの？

松本 そういう系統じゃないよ。

梅田 どういうくずなの。実は松本くんが通り魔とか？

松本 飛躍しすぎだよ。

梅田 なんなの。

松本 もっと、ふつうのくずだよ。

梅田 ふつうって何。

松本 僕みたいなやつのことだよ。

梅田 つまんないね。

桜丘 梅田ア。

ふり返ると、桜丘友樹がいる。

桜丘 ごめんな、遅くなった。

梅田 うん。

桜丘 (松本を見て) 取り込み中？

松本 いや。

梅田 松本くん、くずなんだって。

桜丘 松本？ おまえくずなの？

松本 え、ああ。うん。

桜丘 なんで。何したの、おまえ。

松本 何もしてないよ。何もしてないからくずなんだよ。

桜丘 は？

松本 うん。

桜丘 わかんねえな、何だか。

梅田 やめなよ。

桜丘 え？ なんで？

梅田 もういいの。行こう。

桜丘 松本も？

梅田 松本くんはいいよ。

桜丘 (松本に) いいの？

松本 いいよ。

桜丘 松本。

松本 何。

桜丘 おまえ、おれの名前知ってる？

松本 ……桜丘でしょ。

桜丘 よかった。おまえ、あんまり教室でしゃべらないから。興味ないのかと思った、おれたちに。

松本 いや、べつに。

桜丘 もっと話そうな。じゃあな。

松本 ……じゃあ。

梅田、桜丘、遠ざかりながら、

梅田 何してたの？

桜丘 基礎練。

梅田 抜け出しているの？

桜丘 (あいまいに) おお。なんも言わないし、顧問も。

梅田 うそつくじゃん……。

桜丘 ほんとだよ……。

見送る松本。風が前髪を散らす。

杉谷 松本。松本幹生。

松本 え？

杉谷葉子が窓枠から身を乗りだして、松本を見下ろしている。

杉谷 どうして言っつてやらなかったんだ。それはきみがされていることだろうって。

松本 何が？

杉谷 愚鈍なやつ。

松本 いつからいたの、杉谷。

杉谷 なんだおまえ、寄るところがあるって。どこに寄るってんだい、きみが。

松本 いいだろ、べつに。え、ずっと聞いてたの？

杉谷 まっすぐ家に帰るだけのくせして。恥ずかしいやつ。

杉谷が窓から外へ飛び降りる。

松本 危ないよ、杉谷。

杉谷 (スカートを払い、翻し) 結論は出たのか、松本幹生。聞かせてもらおうか。

松本 僕、やっぱり、魔術には興味がないんだ。

杉谷 きみが魔術に興味を持つとうが持つまいが関係ない。世界を善くする意志があるかどうかを聞いている。

松本 でも、魔術研究会に入れてんだろ？

杉谷 五人集まればきみ、同好会への申請ができるぞ。

松本 園芸部だから、僕。

杉谷 園芸部には迷惑をかけないよ。

松本 どうして僕なんか。

杉谷 くずだからさ。

松本 くず。

杉谷 松本は、自分が何もしていないくずだと言ったね。上等だよ。人はつい何かしてしまうものだ。何も

よけいなことをしない、考えない人間だけがこうして丹精に花を咲かすことができる。見てみる。きみの手で世界に光があふれたよ。生き物の死骸や朽ちた植物の混合物から、これだけの赤や黄色や青のかたち

が姿を現した。地中に眠る力をきみが解き放った。これが魔法でなくてなんだ。素質があると言ってるんだ、わたしは。

松本 言っていることが。

杉谷 わからなくていい。

松本 ……何をさせたいの、杉谷は僕に。

杉谷 特別なことはない。通学路と一緒に点検し、情報を交換し、意見を述べ合い、必要な手順に則り、種を仕込むんだ。

松本 種？

杉谷 やがていつか花を咲かせるための、関係の結節点さ。通り魔の話をしていたら、さっきの女。

松本 梅田さん？

杉谷 この世は悪意でいっぱいだ。思いもよらないところから邪悪が人を蝕む。それこそ足の踏み場もないほどだ。時には自ら悪を選びとるやつもいる。いやなんだ、わたしは。悪に酔いしれ、夜に操られる人間が。花を踏みにじって、仕方がないとすませるやつが。わたしたちは包囲されている。時に降伏を迫られる。冗談じゃないだろう？ 守らなければいけないだろう？ 見張りに立ち、前線に立ち、食い止めなければいけない。この心と、からだで。押し寄せるものとの境に立って。そのための魔術だ。わたしひとりにできることには限りがある。力を貸してほしい。

松本 ……杉谷。

杉谷 松本。すでにわたしたちは生まれてしまったんだ。心はここにあるんだ。なんだかわからないものだ。かたちを変えて、いつの間にか揮発する。それはこちらの意志とは別にある。きみの心を、わたしに預け

ろ。

松本 杉谷。

杉谷 わたしがうまく使ってやる。

松本 ずっと考えていたんだけど、杉谷は。

杉谷 何だ。

松本 友達になりたいってことかな？

杉谷 なんだ？

松本 友達になりたいのかな、僕と。

沈黙。

杉谷 (低く) フフ。

松本 え？

杉谷 なんだ、松本は、友達になりたかったのか、わたしと？

松本 僕じゃなくて。

杉谷 高校生にもなっておまえ。友達とか。

松本 いや言うだろう、高校生こそ、友達って！

杉谷 友達とか。まじで。

松本 何だよ。

杉谷 きみ、友達いないもんな。教室でいつもひとり。

松本 杉谷もそうじゃないか。

杉谷 そういうところだぞ、松本。

松本 何が。

杉谷 支度しろよ。帰る。

松本 帰りなよ。

杉谷 急げよ。

松本 ねえ、杉谷。

杉谷 いやなのか？ 一緒に帰るのが。

松本 ……寄るところがあるから、僕。

杉谷 きみはくずだ、間違いない。すがすがしいほど。

風が吹き、やがて、花々が笑ったような。

4

夕暮れ。 文芸部室。

ラグビーのユニフォームを着た三谷拓二が、ハンカチで目を拭っている。

四宮百合が向かいに座って窓の外を眺めている。

遠くで運動部の掛け声。

三谷 悪かったな。

四宮 何も。

三谷 (鼻をすすり) 驚かせたよな。

四宮 わたしが不用意に屋上に訪れたから。三谷くんのせいではなく。

三谷 (ハンカチを差しだし) あの、ありがと、これ。

四宮 持ってて。

遠く、ホイッスルの音が響く。一瞬、三谷の呼吸が止まる。

三谷 ……。

四宮 よく行くの、屋上に。

三谷 まあ。時々ね。(四宮の視線を受けて) ……止まらなくなるんだ。蛇口が壊れたみたいに。

四宮 (片手を挙げて) わたし、意見があるのだけれど。

三谷 ん？

四宮 いまの状態は、あまりにも異常だと思う。そんな場所に身を置いていると、三谷くんは心身をおかしくする。

三谷 ……いや、別に。

四宮 やめられないの？

三谷 やめる？

四宮 三谷くんがいま消耗しているのは、ラグビーとは関係のない事柄でしょう？

三谷 関係はあるよ。おれが悪いんだ。

四宮 なぜ。

三谷 才能がないんだ。

四宮 才能なんて、不確かな言葉だよ。

三谷 うまくやれないんだ。

四宮 うまくやれないのなら、上達するように導くのがコーチの務めでしょう？ 三谷くんを辱めるのは、筋が違うのではないかな。

三谷 (首をふり) 何べんも同じこと言われるんだ。でも、できないんだ。やっても、やってもだめなんだ。

おれが、おかしいんだ。

四宮 わたしから伝えましょうか？

三谷 何？

四宮 誰か、信頼できる教師に。三谷くんが殴られていること。

三谷 よせよ、言うなよ。

四宮 でも。

三谷 ほっとけよ、関係ないだろ。ぜったい、やめろよ。

四宮 ……。

三谷 仕方ないんだよ。おれが悪いんだから。

四宮 そうなの？

三谷 そうだよ。

沈黙。

三谷 ……四宮さん。

四宮 はい。

三谷 (周囲を示し) これ全部、四宮さんの本？

四宮 まさか。文芸部の蔵書。

三谷 ずっと何か読んでるよね、教室で。飽きない？

四宮 飽きるものではないかな。

三谷 結界張ってる感じ、本で。だれの侵入も許すまじつつうか。

四宮 そんなつもりはないけど。

三谷 隣の席、二反田さんでしょ？ つまらなそうにしてたよ。本ばかり読んでるから、四宮さん。

四宮 二反田さんが？

三谷 つきあい、大事にしなよ。そういうの、見てるから、みんな。二反田さんと仲良くなれたら、もっと安定するよ、教室で。

四宮 安定。

三谷 うん。二反田さん、味方につけるといいよ。やっぱり大事だからさ、中心にいるやつとつながるって。

そこからまたいろいろつながっていくし。大事だよ、誰とつきあっているかって。

四宮 その考え方って。

三谷 うん。

四宮 友達を、貨幣のように扱っているね。

三谷 かへえ？

四宮 お金。できるだけ稼いで、ため込んで、投資をして、元手を増やして、安心する。多ければ多いほどよくて。そのくせ自分からはらっぽで。お金を自分の力だと錯覚して。そういうことかな？

三谷 ばかにしてんだろ。

四宮 何が？

三谷 わかるよ。ばかにしてんだろ。

四宮 さつきから三谷くん、あべこべのこと言ってる。

三谷 は？

四宮 ばかにしているのは三谷くんなのに。

三谷 何が？

四宮 居心地が悪そうだね、文芸部室。どうして？

三谷 何が？

四宮 気になる？ ここにいるの、誰かに見られたら。あとでなんて言われるか。

三谷 ……。

四宮 あいつ、文芸部に出入りしてんだけど。受ける。ラグビー部で相手にされてないんだって。だから底辺の連中とつるんでんだね。かわいそうだね。見てられないね。ご愁傷様。

三谷 なんかさ。自分が何でも見透かしているみたいな、そういう態度、ばかみたいだよ、すごく。

四宮 わたしの態度が気に障ったのなら、謝りましょうか？

三谷 やめてくれない？

四宮 謝ってもいいけど。

三谷 やめろよ。

四宮 謝るよ？

三谷 やめろ。

四宮 どうして？

三谷 苛々するんだよ。

四宮 そうね。謝るね。ごめんね。

沈黙。やがて三谷が背中を震わせる。

四宮 使えば。ハンカチ。

三谷 (目を拭う) ……四宮さんはどうして屋上にいたの？

四宮 べつに。観察。

三谷 鳥？

四宮 ううん。けもの。

三谷 けもの？

四宮 (三谷を指さして) しなやかに筋肉を動かして、掛け声をあげている人たち。たまを投げたり、蹴ったり、かついだり、ある秩序のもとに走り回る者たち。

三谷 ……何それ、特殊な趣味？

四宮 そう。好きなんだ。けものの群れからはぐれて、ああだこうだ、おしゃべりをするのが。

三谷 おしゃべり？ 誰と？

そのとき、二反田一穂が勢いよく文芸部室の扉を開ける。

二反田 (扉をあけながら) ガラガラガラッ。二反田でいいいいす。(扉を閉じながら) ガラガラガラッ。ピシャン！ うふーっ、もう、ちよつとちよつとちよつと四宮氏い、屋上で集合って言ったじゃないですか！ 探しちゃいましたよ、何やらかしてくれてンですか！ まじでまじで急がないと大宇宙より飛来せし暗黒神が痺れを切らして地球ごと……。(三谷の存在を認識する)

三谷 ……二反田さん？

二反田 ……。

三谷 え、あ、え？ ……えっ？

沈黙。

三谷 文芸部？ 二反田さんも？

二反田 四宮氏。

四宮 二反田氏。

三谷 氏。

二反田 どっ、どうしてだ、だ、だだんす、だ、だ男子がいるので、ありますか？

四宮 落ち着いて、二反田氏。この人は傷ついて、いま、羽を休めているだけ。

二反田 ここで？

四宮 そう。文芸部室で。

二反田 (三谷を見て) ……傷ついているのですか？

三谷 傷ついてねえよ。

二反田 (四宮を見る)

四宮 男の意地。

二反田 ……どうも、あのオ、…………ぺこり。(頭を下げる)

三谷 二反田さん。

二反田 はい。

三谷 どうして擬音を口にしてんの。いちいち。

二反田 ……。

三谷 なに、それ？ どういう設定？

二反田 ……。

三谷 (四宮に) 黙っちゃったよ。

四宮 謝りなさい。

三谷 え？

四宮 あなた、母語が日本語でない方の発音に対して、どうして片言なの、と聞きますか？

三谷 いや、

四宮 地方出身者の方を目の前にして、どうして方言でしゃべるのかと聞きますか？ 聞きませんよね？

三谷 たぶん。

四宮 言語の使用に関して人が人に辱めを与えるのは最低の所業です。謝りなさい。

三谷 ごめん。二反田さん。

二反田 いいけど。

三谷 あの、二反田さん。

二反田 (小声で) じろり。

三谷 教室と、雰囲気が違うね、なんか。

二反田 (詰めより) おまえ何、三谷だっけ？ (舌打ちをし) ぶっ殺すからな、なんかしゃべったら。

三谷 (のけぞり) ああ、いつもの感じだね。

二反田 は？

三谷 あのさ。さっき暗黒神って言った？ 大宇宙より飛来せし……。

二反田 うわーっ！ (顔を両手で覆う)

三谷 好きなんだ、おれ。ティンクルティン・クル・リン・パの『深淵の恐怖』シリーズでしょ？

二反田 え？

三谷 二反田さんも読んでいるの？

二反田 ……三谷氏？

三谷 (舞いあがり) うそ、えつ、ちよ、泣きそう、ほんとに？ 話ができる人いなかったから、ずっと。

まさか二反田さんが……。

二反田 (手のひらを突き出して制する) 『氷の海の淵』と『悦楽の谷底』だと、どっち？

三谷 『悦楽』だね。

二反田 それじゃあ、デイル・ブルリ・ブルリ？

三谷 断然、デイル・ブルリ・ブルリ。

四宮 (片手を挙げ) スッペーンは？

三谷 スッペーンもいいけど、コネケツトルだから。

二反田 コネケツトル許すまじ！ まじで！ 夜も眠れぬ怒り！ ぶおん、ぶおん！ (拳を振り上げる)

四宮 でも。コネケツトルでありながらボツボルの庇護に置かれていたスッペーンの気持ちを思うと、たまらないものがある。

二反田 結局裏切ってたからあいつあ、ペペペペだね。

三谷 (人差し指を立てて) いや、これからの展開次第じゃない？ 最終巻のスッペーンの手紙は、ボツボルのために身を投げうつ決意を示しているとも解釈できる。

二反田 はあああ？ 何言いだしてくれちゃってんの、調子乗ってんじゃないやねえぞ、てめえはよお？

三谷 思いだして、二反田さん。スッペーンはこう言ってるんだ。やがておれはこの地に引き返し、ポツポツの民に血の雨を注ぐだろう。

二反田 どこに解釈の余地があるってんだよ？

三谷 血は命の象徴だろ。スッペーンは実際、お世話になったポツポツの老人が血液の病におかされたとき、自分の血を分け与えようと必死だった。

二反田 ……点、点、点、丸。

四宮 確かに。あの場面のスッペーンと血液の印象づけには作為が感じられる。

三谷 スッペーンの血の雨発言の真意はどうあれ、お世話になったポツポツの民の窮状を、スッペーンこそがこれから救うという伏線なんじゃないか？

二反田 オイオイオイ、考察してんじゃねえか、一丁前によ。

三谷 (首をふり) まあ、妄想だけど。

二反田 まさかとは思うけどよ。書いてたりしないよな、自分でよオ？

三谷 ……。

四宮 そうなの？

三谷 (照れて) 書くっていうか、たまに。なんか。

二反田 (背をバンバンとたたき) ちつきしよう、てんめえ、抜群に狂ってんじゃあねえか。おおい、四宮氏い、文芸部に新入りだあ！

三谷 えっ。

再び遠く、ホイッスルの音。何かの終わりを告げるような、長い響き。
いつのまにか室内は深く翳り、三人の影が長く伸びている。

三谷 行かなきゃ、おれ。

二反田 たま遊びしてる場合じゃねえだろがよ、三谷氏。これからだろオ？

三谷 でも。

四宮 遊びにおいで、三谷くん。いつでも。

三谷 ……うん。(去ろうとして、振り返り) いや。来るわけねえだろ。

急速に影が下りる。

5

血の滴るような夕景。

路上。船見ワタル、島貫和砂、岸边風佳、波江岬が歩いている。

ふと立ち止まり、

船見 ここか。通り魔が出たっていう。

島貫 べつに、なんてことないな。

船見 何かない？ それっぽいもの。

岸边 何かって？

船見 血痕とか。包丁とか。色眼鏡とか。ニット帽とか。

島貫 落としすぎだろ、状況証拠。

波江がどこか遠くを見つめて佇んでいる。

岸边 波江、どうした？ 見つけた、何か？

波江 (ふりかえり、微笑んで首を振る)

船見 気をつけろよ、どこで見てるか分かんないんだから。油断するなよ。

島貫 仮に、そいつが本当にここにいたとして。つねに潜んでいるとは限らんだろ。

船見 いや、しかし、都市の街路に身を隠すうってつけの場所が、そうそうあるものでもあるまいよ。

島貫 語調がいかついんだよ、どこの大正文学だよ。

船見 かくなる上は待ち伏せか……。

岸边 捕まえて、どうしたいの、船見は？

船見 説教するんだよ。

岸边 説教。

船見 お年寄りばっか狙ってんだろ、そいつ。ふざけてんだろ。

島貫 そいつなりに考えてんじゃねえの。

船見 は？

島貫 だから、ほら、駆逐してるつもりなのかもしれない、そいつにとっては。

船見 駆逐？

島貫 いらぬものっていうか。不必要なもの、どかしてるっていうか。善意で。

船見 島貫。ふざけんなよ。

島貫 いや、おれじゃねえから。

船見 おまえ、もの言わぬ通り魔の意志を先取りして語ってんじゃねえぞ。

島貫 だからおれじゃねえし、みんな、そう言ってるから！

岸边 (顔の前で手をふり) 言ってるない、

船見 (同時に) みんなって誰だよ、おれは言ってるねえよ。

波江が二人の間に入る。

船見 ……。

島貫 ……。

岸边 よせよ。な？ 道ばたで。

船見 ……年取ったら、思うように、からだ動かせねえんだよ。言葉だつて出にくくなるしよ。うちのじいちゃん見てるとわかるよ。でも、そこにあるものは、何も変わらずにそこにあるんだよ。

島貫 わかってるよ。

船見 五十五年後には七十二歳だよ。

岸边 七十七年後には九十四歳だ。

島貫 生きてるか、わかんないな。

岸边 だいじよぶ、無敵だから、うちら。

島貫 無敵？

船見 無敵だよな、おれら。

岸边 無敵無敵無敵。なっ、波江。

波江 (微笑む)

沈黙。

島貫 おまえら、今日、女子としゃべった？

船見 あたりまえだろ。

岸边 (重ねて) 何を聞いてんだろ、この人。

船見 あ、島貫、しゃべってねえの？

島貫 めちゃくちゃしゃべったつうんだよ。

岸边 何人？

島貫 いちいち数えてねえけど、十人？

船見 ハハ。

岸边 少な。

島貫 は、おまえ何人？

岸边 (指を折り) え、二十八人？

島貫 あ、母ちゃん入れたらおれ三十人だわ。

船見 何人いんだよ、おまえの母ちゃん。おれだって姉ちゃん入れたら五十人だし。

島貫 数じゃねえから、船見。中身だから、問われているのは。

岸边 (船見と島貫の肩を抱き) まっ、男子は、おまえらだけだから。

島貫 おれも。

船見 うん。

波江 ……。

なんとなく波江を見る三人。

島貫 波江がしゃべらなくなって何年？

岸边 年単位じゃなくね？

島貫 何考えてんの、波江。

船見 何か、考えてることがあるんだろ。そうだろう？

波江 (微笑んでいる)

島貫 正直に答えろよ。おれたちと一緒にいるのが、つらいか？

岸边 わかんないけどさ。大変なことだよ、何もしゃべらないって。よほどの決意がないと、できないよ。

船見 昔、砂漠を四十日さまよって、悪魔に誘惑された男がいたんだよ。

島貫 急に、何？

船見 悪魔はずうっと、その男に話しかけ続けた。おまえを世界の王にしようとか、ちゃんとパンを食べなさいとか。えらいひとに助けを求めたらどうか、とか。

島貫 いいやつだね、悪魔。

船見 男は全部、断った。無視した。拒絶した。

岸边 ひど。

船見 悪魔と向かい合うときは、相手の話に乗っちゃいけないんだ。それをしたら最後、相手の論理に引きずり込まれて、わが身の自由を奪われる。

島貫 何が言いたいんだ、船見。

船見 時には沈黙が、おれたちの身を守る。そういうたたかい方もあるんだ。

島貫 おれたちが悪魔ってことか、波江？

波江が微笑んで首をかしげる。

沈黙。

岸边 たたかうか、うちらも。

島貫 は？

岸边 波江をひとりにはさせておけないよ。そうだろう？

船見 そうだな。波江には世話になったしき。

島貫 しゃべらないってことか、おれたちも？

岸边 いや。こちらは拳でたたかう。

島貫 肉弾戦かよ。

船見 やれやれ、鍛え抜かれたこのマツスルの出番かな？

島貫 へろへろじゃねえか。

岸边 だいじよぶだ、波江。こちら、ずっと一緒だから。

船見 そうよ。無敵だから。

島貫 無敵か。

船見 何が来たって、ぶっ飛ばすから。

岸边 そう、無敵無敵無敵ーっ！

島貫 おうおう、はしゃぎちらかしちゃってよオ。

岸边 無敵キツク！

船見 無敵。パンチ！

島貫 無敵ガード！

岸边 シュインシュインシュイイイイ！

船見 ビビビビビビ！

島貫 チュドーン！

悠里と時恵の声が近づいてくる。二人、話の途中で大きく笑いながら、

悠里 仮にだよ。仮に、わたしの彼氏で高木くんっていうのがいたとして。

時恵 誰だよ、高木くん。

悠里 高木くんはサッカー部だよ。

時恵 サッカー部だめ、むり。ろくなやついない。

悠里 やめろよ、偏見。高木くんはきれいな心だよ。謙虚だよ。

時恵 架空の存在、擁護するなよ。設定変えろよ。

悠里 おまえさ、わたしと高木くんの積み重ねた歳月を知らないで、何？

時恵 どんだけ積み重ねてんだよ、妄想。

悠里 いつも味方してくれるの、大好き。

時恵 あのね、それ幻。

悠里 は？

時恵 その胸の高鳴りも幻、熱い思いも幻、切なさも幻。

悠里 何それ般若心経？

時恵 (向こうを指さして) ほら、現実が固まってっから、そこに。

船見、島貫、岸边、波江が近づいてくる二人を見ていた。

悠里 なに見てんだよ。見せ物じゃねえよ。

慌てて目をそらす。もじもじしている。

悠里 何してんの？

船見 いや……。

悠里 ん？

岸辺 その……。

悠里 (時恵に) なんでしゃべんないの？

時恵 知らない。

悠里 (島貫に) なんでしゃべんないの？

島貫 あ……。

時恵 なんで、道端で固まってんの？

顔を見合わせる二人。

悠里 なんか言えよ。

船見 ……お。落ち着くから？

時恵 ゴキブリじゃん。

波江 ハハハ。

沈黙。その場の全員が波江を見る。

波江 ハハ。

悠里 笑ってるよ。

島貫 おう。

船見 笑ってら。

岸边 ハハ。

島貫 ハハハ。

船見 ハハハハハ。

波江 ……。

その頃、教室で。

杉谷と松本が窓から外の風景を眺めている。

松本 ……帰るんじゃないかったの、僕たち。

杉谷 帰るよ。

松本 帰って良いかな。

杉谷 教室に、西日が差しこむ。茜色だな。

松本 うん。

杉谷 巨大な生き物の内臓にいるみたいだ。

波江 死ね。

別の場所で。

小熊と四宮が並んで座っている。

四宮 文芸部に入りたいの？

小熊 入りたいと申しませうか。なんといいですか。探求と申しませうか。

四宮 どうして？

小熊 ……言葉がこわいんです。この人はどういう意味でこの言葉を使っているのか、どういう思いを投げ込んでいるのか、その単語の組み合わせはどんな意図によるものなのか、ずっと、いつも、相手の発する言葉の背後をうかがい続けて、わたし、それで、ほとほと疲れました。もともとわたしが何をどう受け取って、世界を見ていたか、わからなくなりました。

四宮 重症だね。

波江 ばか。

別の場所で。

北斗がチクワを手にして、しゃがみこんでいる。梅田が通りかかる。

梅田 北斗くん？

北斗 梅田さん。

梅田 どうしたの。また、猫？

北斗 うん。見つからないんだ、いつも餌をあげている子。

梅田 そっか。

北斗 梅田さんは、お出かけ？

梅田 うん。

北斗 気をつけてね。

梅田 うん。

北斗 ……。

梅田 ……。

北斗 行かないの？

梅田 うん。

北斗 そっか。

梅田 いいね、猫は。

北斗 うん？

梅田 好きな時にいなくなって。探してもらえて。

波江 くず。

別の場所で。

三谷の背に、桜丘が声をかける。

桜丘 三谷。

三谷 桜丘。帰ったんじゃないの？

桜丘 戻ってきた、用事済ませて。何、おまえ辞めるの？

三谷 ……なんで。

桜丘 来てないだろ？ 今日も。

三谷 やめないよ。

桜丘 やめるなよ。おまえいないとだめだろ、ぜったい。

三谷 ……うん。やめないから。(笑みを浮かべる)

波江 卑劣。

別の場所で。

時恵と悠里が大笑いしている。

悠里 (笑いながら) それで、玄関開けたら、高原くんと高村くんが毎朝迎えに来てくれて……。
時恵 (笑いながら) 妄想のカーニヴァルじゃん、おまえの頭んなか……。

その姿をまぶしく、遠巻きに眺めながら、

船見 女子ってさ。

島貫 うん。

船見 自分がかわいいって、知ってるのかな。

岸辺 研究が必要だな。

教室で。

杉谷 松本。日差しを手でつかまえられるか？

松本 むりだよ。

杉谷 そういうことだよ。

松本 何が？

杉谷 それがわたしたちの肌をあたたためるのは、永遠ではない。けれども、心にはずっと燃え続ける。

松本 杉谷はいつもそんなことを考えてるの？

杉谷 それ以外に考えることがあるか？

それぞれの場所で。いつの間にかそれは一つの教室の情景のように見える。

小熊 失礼しました。帰ります。ありがとうございました。

四宮 小熊さんの言葉は、傷を負っている。つばさをもがれて。

小熊 は？

四宮 わたし、言葉が目に見えるの。

小熊 何を言っているんですか？

四宮 見えるの。ありありと。具体的に。リアルに。

小熊 ……あの、どういう？

杉谷 この光はきれいか、松本？

松本 うん。

杉谷 よく見ておけよ。これは、わたしとおまえで見ている光だ。過ぎ去れば二度と訪れない。これが世界だ。

松本 杉谷。

杉谷 何だ。

松本 ご飯粒ついてるよ、肩に。

杉谷 取ってよ！

小熊 わかりません、おっしゃっていることが、わたしには。

波江 憎しみ。さもしさ。無理解。

三谷 (笑みを浮かべたまま) わかんないだろ、桜丘。

桜丘 何？

三谷 おれが、いかに終わっているか。どうしようもないやつか。心のなかで、何言ってるか。
波江 最悪のくそ。

梅田 猫になりたいよ、北斗くん。

北斗 梅田さんが？

梅田 そうしたら、何もむずかしくない。あれもこれも食い破って、もう帰らない。

桜丘 なあ。つきあおうか、おれ、朝練。

三谷 いいよ。

桜丘 でもさ。

三谷 ほっとけて。いいんだよ。(背を向ける)

北斗 食べる、チクワ？

梅田 食べない。

四宮 (鞆からノートを取りだし、差し出す) あなた自身を記述しなさい。言葉によって。

小熊 できません。そんな、おぞましいこと。

四宮 それが試験です。入部のための。

小熊 もうけっこうです。

船見 あれ？ 波江は？

岸辺 え？ 消えた？

桜丘 三谷。

四宮 楽しみにしているね。

島貫 どこ行った、波江？

桜丘 また明日な。

やがて人々がいつせいに視線をある方向に向ける。

街の高台で、波江が風景を眺めている。

二反田が通りかかる。

二反田 波江。

波江が急速に振り返る。

二反田 うお。

波江 二反田さんか。

二反田 何やってんだよ、ひとりで。黄昏キメてんの？

波江 誰かが引き受けなければいけないんだ。

二反田 (よくわからないが) 最近、何だ、元気ないんだって？

波江が二反田の奥底を貫くような視線を向ける。

二反田 ……見すぎ、見すぎ。視線が重いよ、おまえは。

波江 二反田さんはこっち側の人だろ。

二反田 ん？

波江 目覚めている人だ。いつも、屋上で。空を眺めている。ぼくは知っている。

二反田 何言ってるの、波江？

波江 教えておくね。もう侵入しているよ。姿を隠して。街の奥に。

二反田 話、見えないんだけど。

波江 森の深くに。ここと、むこうの重なりのなかに。はじまるよ。二反田さん。

二反田 は？

波江 はじまるよ。血が流れたなら、それが合図だ。

二反田 ……（宣言するように）帰るわ。

二反田が去る。波江がひとり。

波江 ……はじまるよ。世界は夜になる。

小さな公園。深夜。

梅田がベンチに腰掛けている。桜丘が少し離れて立ち、何も無い場所を眺めている。

桜丘 ほんとのこと言おうか。おれ狼男なんだ。月を見ると変身するんだ。誇り高き種族なんだ。月夜の晩は住宅街の貧相な森に身を隠して、いつか荒野に駆けだしていく日のことを夢に見ているんだ。よかったな、今夜が月のない夜で。

梅田はまっすぐどこかに視線を放っている。

桜丘 ……変わったよな、ここいらも。ずっと工事してるし。覚えてる？ 森でよく遊んだろ、みんなと。用水路があつてさ、落ちないように、蓋の上歩いて。草ばかりで、わけわかんないところにつながりそう。いまから思えば、たいしたことない、ちっちゃな茂みだったかもしれないな。どこにあったんだか、もうわかんない。覚えてる、梅田？

梅田が桜丘を見る。

桜丘 ……どれくらい沈黙してられるか、勝負しよっか？ せっかくおれも呼びだされたことだし、勝負

の
一つでもしておかないことにはな。

梅田 ……。

桜丘 沈黙だぞ。いい？ セーの。

梅田 桜丘。

桜丘 はい。

梅田 何時、いま。

桜丘 一時になるかどうか。

梅田 (立つ) さつき、家に帰ってきたら。

桜丘 うん。……え、さつき？

梅田 家の前で。なんか変だなって思って。

桜丘 うん。

梅田 ああいう時って、脳みその認識より早く、空気が教えてくれるっていうか。

桜丘 何の話？

梅田 家の前で、死んでて。

桜丘 何が？

梅田 車にはねられたみたいで。

桜丘 誰が？ 何？ 車？

梅田 もしそれだけの血が、体からあふれたら、ぜったいに影響の出るような、重たそうな、まとまった量の赤いかたまりが。

桜丘 おい。

梅田 はみ出した固形物と、血が、路面に濡れていて。

桜丘 猫か？ 猫の話か？

梅田 わたしの家の前で。

桜丘 人間じゃないよな？

梅田 じゃなかったらなんなの？

桜丘 いや、事態の緊急性が。

梅田 (口のなかで) 信じらんない。

沈黙。

桜丘 人間じゃないよな？

梅田 わたし、考えてたのだけど、

桜丘 おい、

梅田 これはいったい何の象徴だろう？

桜丘 象徴？

梅田 丸まって、血だまりに転がっているの、さっきまで生きていたものが、家の前で。この事実はいま、
わたしに何を語りかけているのだろうか？

桜丘 不健全だぞ、そういうの。

梅田 不健全？

桜丘 なんにでも意味を追い求めるなよ。ただそういうことが、起こっただけ。そうだろう。

梅田が桜丘に近づき、顔を覗き込む。

梅田 ……わたし、くさい？

桜丘 は？

梅田 わたし、くさい？

桜丘 ぜんぜん。

梅田 くさいかな、少し？ 汗のおいがする？

桜丘 ねえ、おれの話聞かないよね、梅田って。

梅田 いやなにおいする？

桜丘 におわないって言ってんだけどな。

梅田 そう言ってよ！

桜丘 ……え、言ったよ！ ぜんぜん、って！

梅田 ぜんぜんは、ぜんぜんだろ。ぜんぜんだめだ、何言っただか。日本語が心配だよ、あなたの。

桜丘 はあ？

梅田 やり直し。

桜丘 ……におわないけどオ。……いいにおいする。

梅田 はあ？

桜丘 風呂入ってきた？

梅田 そうだけど。

桜丘 家、帰ってないのに？

梅田 そうだけど。

桜丘 へえ。

木々のざわめき。

桜丘 ……埋めに行く？

梅田 え？

桜丘 気分悪いだろ、そいつも。死してなお、そのまま転がり続けていたら。

梅田 いい。

桜丘 なんで？

梅田 いい。

桜丘 ……いいのか。

沈黙。

梅田 桜丘。

桜丘 なんじゃ。

梅田 わたしのこと、ぜったい好きにならないでね。

桜丘 は？

梅田 好きにならないで。

桜丘 すげえな、その、誰しもがわたしのこと好きになる、という絶対的な姿勢。

梅田 約束してね。

桜丘 どうしようかな。

梅田 約束してね。

桜丘 傲慢だよ、それ。

梅田 桜丘。

桜丘 大丈夫だよ。

その時、赤色ランプの回転に二人が照らされる。

車の走行音。ゆっくりと去っていく。

桜丘 (眺めるでもなく) ……。

梅田 何が聞こえる？ いま。

桜丘 何も。

梅田 風がごうごう鳴っている。耳もとで。

桜丘 ……トラックが走っていった。遠くで。

梅田 ききき、と店先の旗竿がきしむ。

桜丘 葉っぱがこすれてる。

梅田 虫。

桜丘 (耳をすまし) ……。

梅田 それだけ？

桜丘 うん。

梅田 聞こえない？

桜丘 もう、聞こえない。

梅田 どれくらい沈黙できるか勝負しようよ。

桜丘 おう。負けねえけど。

梅田 ……。

桜丘 ……。

梅田 桜丘。

桜丘 はやくない？ 粘れよ、もっと。

梅田 風。錆びついた公園。時計は夜の一時。死体が転がっている、どこかで。これは、何の象徴だろう？

桜丘 ……。

梅田 ねえ。わかる？

桜丘 今日、何かが死んで、おまえは生きてるってことだよ。

梅田 ……。

桜丘 そうだろ。

風が吹き迷う。夜のどこかで血がしたたる。

幕。

第二幕

1

朝。教室。

人々が集まる。言葉が泡立つ。

少しの騒がしさ。だが、そこに一つの旋律はまだない。

何も始まっていない。

辺りに漂うのは、やわらかな、繭の内側のような、まどろみの気配。

ある一角に、本を読んでいる時恵。ぼうつと青空を眺めている悠里。

誰かの「おはよう」の声が響き渡る。
机に突っ伏して眠っている者もいる。
桜丘が足を伸ばして柔軟運動をする。
四宮が登校をして、自分の席に着く。
船見、島貫、岸边が沈黙思考の風情。
三谷が教室の片隅でノートをめくる。
時恵が席を立ち、四宮のそばに行く。
小熊が三谷の背後で、立ち止まった。

小熊 おはようございます。

三谷 あ、……おはよう。

小熊 失礼ですが。その文字列は、何が記されているのですか？

三谷 (慌てて) 何でもないよ。

小熊 そうですか。

三谷 うん。

小熊 小説ですか？

三谷 えっ？

小熊 ちがいますか？

三谷 ちがう、ぜんぜんちがう。

小熊 失礼しました、目に触れてしまったので。

三谷 ちがうから、ほんとに。

小熊 なんですか？

三谷 えっ？

小熊 何を書かれていますのですか？

三谷 予習だよ、授業の。

小熊 触れない方がよいことでしたか？

三谷 いや、うん、いいけど。

小熊 鳥巢先生より、課題文を回収するように言付かっています。

三谷 現代文？ 今日だっけ？

小熊 わたしのほうで進めておきますか？

三谷 いいよ、おれ集めるから。

小熊 そうですか。お願いします。

最前のやりとりと同時に、四宮に本を差しだす時恵。

時恵 四宮さん。ありがとう、これ。

四宮 もう読んだの？

時恵 うん、好き。寂しくて、なんか。

四宮 続編もいつとく？

時恵 あるの？

四宮 うん、四部作だから。持ってくる、今度。

時恵 読みたい。ありがたい。

「これ読んだ時、なんとなく東山さんのこと思いたして」、「え、わたしこんな上等な女？」などと二人の話が続く。

同時に、船見、島貫、岸辺の三人が、

岸辺 ま。……窓辺。

島貫 べ。……ベンチ。

船見 ち、……地球温暖化。

島貫 どこにロマンティックの要素があるんだよ。

船見 ち、……知恵熱？

岸辺 それ、ロマンティック？

船見 ち、……血祭り？

岸辺 まじめにやれ。

船見 (頭を抱えて) ち？ ちようちん？

時恵が自分の席に向かう。

時恵 桜丘、足じゃま。

桜丘 わり。ちよつと長すぎるところあるから、おれの足。

時恵 うん、空間に占める体積の割合がひどいよね、それ。

桜丘 あげないよ。

時恵 いらんないよ。

そのやりとりを眺めていた悠里が、

悠里 桜丘って、いつ坊主にするの？

桜丘 坊主？ おれが？

悠里 泣いてるよ、頭皮が。われを表に出せって。

桜丘 どういうこと？

時恵 (桜丘に) 聞かなくていいよ、こいつの話。

悠里 似合うと思うけど。

桜丘 そう？

悠里 (凝視し) 頭のかたち良さそう。

時恵 黙れよ、おまえ。

悠里 (窓から空を眺め) 今日も青いね、空が。人の気も知らないで。

教室の外から、松本と杉谷の声が聞こえてくる。

杉谷 ほら、始業のチャイムが鳴るぞ。おまえちよつと遅いよ、松本。

松本 いいだろ。遅刻じゃないんだから。

杉谷 よくもそんなことが言えるな、あれほどわたしを待たせておいて。

松本 ねえ、杉谷。待つてなくていいから。

杉谷 待たせない努力をしろ。(吐き捨て、足早に歩く)

松本 (その背に) 別々に登校しよう、朝は。

二人が教室に入る。

松本 聞ってる、杉谷？

杉谷 ……。

松本 杉谷？

杉谷が着席する。

松本 え、ぼくが無視されたみたいになるから。

杉谷 (そっけなく) 話しかけないでくれる？

松本 え。

桜丘 おはよう、松本。

松本 ……おはよう。

教室中が、そのやりとりを見ていた。

何となく、しんとするなか、

船見 ち、……沈黙。

二反田が「おはよう」と口にして教室に入る。

周囲の者が口々に「おはよう」と返す。「今日、風強くない？ 髪の毛やば」などと口にしながら、

二反田 おはよう、四宮さん。

四宮 おはようございます。

二反田 (見まわして) あれ、梅田さんは？

四宮 梅田さん？ まだみたいだけど。

二反田 打ち合わせする約束なのに、世界史の発表。

桜丘 寝坊だろ。

二反田 寝坊？

桜丘 たまにやるんだよ、あいつ。(あくびをする)

二反田 ふうん。(荷物を置き、一度教室を出る)

そしてある一角では、蟹江みどりが寝息を立てている。

その傍らに山羊沢鉄平が立ち、しばし逡巡する風情。

山羊沢 蟹江。

蟹江 ……。

山羊沢 蟹江。

蟹江 ……。

山羊沢 蟹江。蟹江。蟹江。

蟹江 ……え？

山羊沢 日直だろ、今日。学級日誌。(差しだす)

蟹江 (受け取り) 取ってきてくれたの？

山羊沢 うん。

蟹江 えらいね、山羊沢。

山羊沢 えらいんだよ、おれ。…あれ、泣いてる？

蟹江 は？ 泣いてないけど。(目をぬぐうと、確かに濡れていた)

山羊沢 どうしたの？

蟹江 ……夢を見た。

山羊沢 どんな？

蟹江 わかんない。なんか。なんだろう。しらない。

山羊沢 なんだよ。

蟹江 どっか行って。

山羊沢 いやおれの席だからね、ここ？

蟹江 もういいよ。

山羊沢 何が？

蟹江 しらない。

沈黙。

山羊沢 寝ごと言ってたぞ、蟹江。

蟹江 (目をつむったまま) どんな？

山羊沢 世界が終わる。

蟹江 (目をつむったまま) は？

山羊沢 世界が終わる。

蟹江 ……そういうのいいから。

山羊沢 え？

蟹江 言わないし、そんな寝言。

山羊沢 言ってたんだから。

蟹江 終わればいいよ。

山羊沢 何？

蟹江 終わるなら終われよ。そうだろ。

山羊沢 なに荒ぶってんだよ。

その時、北斗がやってくる。

北斗 おはよう。

山羊沢 あ、おはよ。

北斗 けんか？

山羊沢 え、うん、なんか……。わかんないよ。

霧崎静を囲んで、雨ヶ谷舞、雪村明、雷音寺階、嵐山類が教室に入る。

嵐山 山羊沢。山羊沢。

北斗 呼ばれているよ。

嵐山 なあ、山羊沢。おまえも来いって。

山羊沢 何？

雨ヶ谷 海！ 別荘！ この世の果て！

山羊沢 この世の果て？

雪村 霧崎さんの別荘、海辺にあるんだって。

山羊沢 えっ、別荘？

「別荘？」、「すげっ」、「いいな」など、周囲の席の者が、その言葉に反応する。

雷音寺 計画立ててんの、みんなで。別荘襲撃。

霧崎 襲撃はしないで？

雨ヶ谷 最果ての別荘！

雪村 果ててないから、失礼だから雨ヶ谷。

嵐山 行こうよ。海だよ！

山羊沢 海？

二反田 (戻ってきて) すごいにぎやか。何の話？

雷音寺 海に行く計画。クラスのみんなで。

二反田 海？

雨ヶ谷 霧崎の別荘。二反田も来い。

二反田 え、別荘？

霧崎 うん、よかったら。

二反田 霧崎さん、何、ご令嬢なの？

雨ヶ谷 そうだよ！ 霧崎はすごいんだよ。

霧崎 わたしはすごくないんだよ、雨ヶ谷さん。

雷音寺 いや、もうすごいよ、国家レベル。

霧崎 雷音寺、ちよつと。

二反田 知らなかった、そんな貴族がいたのか、うちのクラス。

霧崎 たいしたことはないから、本当に。がっかりさせるかも。

二反田 しない、しない。え、いいの？ わたしも？

霧崎 もちろん。

雨ヶ谷 みんなだ。みんな。山羊沢も、蟹江も。(船見や桜丘、三谷に) おまえも、おまえも、おまえも！

三谷 何？

桜丘 おれも？

船見 えっ、おれも？

岸边 いいの？

雪村 ちよつと、雨ヶ谷。全方位にご迷惑でしょ。

雨ヶ谷 迷惑？

霧崎　うちは何も。

桜丘　どんな海？

霧崎　静かな海だよ。裏庭の階段をおりると、浜辺につながっているの。

二反田　そんな世界観が実在するの？

霧崎　外からは誰も入ってこれない。

桜丘　すげえな、それ。

嵐山　うちのクラス、全員で行こうぜ。

雨ヶ谷　もう来い。来い。来い。みんな、来い！

北斗　小熊さんも行く？

小熊　いえ、わたしは。そんな大人数でお邪魔をしては、ご迷惑では。

雷音寺　平気だよ、へたするとあそこ学校より広いし。

霧崎　それはないって。

雷音寺　身一つでおいでよ。そろってるから、ぜんぶ。

悠里　雷音寺は霧崎さんの何なんだよ？

雷音寺　腐れ縁だよな。

霧崎　まあね。

二反田　つきあってたんの？

霧崎　ないないないないない。

雷音寺　（同じしぐさで）ないないないないない、ない！

時恵 通い合ってるじゃん、呼吸。

霧崎 ぜったい、ない。ない！

雷音寺 じゃあ、ある。ある！

霧崎 はあああ？

嵐山 ういー、なかよしい。

中心から少し離れて、

山羊沢 蟹江、どうする？

蟹江 どうもしないよ。

山羊沢 でも。

蟹江 行ってきたよ、名指しなんだから。

山羊沢 ……どうしよ。

松本が霧崎たちのほうを眺めているのを見て、

杉谷 行くつもりか？

松本 いや。

杉谷 海か……。

松本 ……。

北斗 いつ行くの？

雷音寺 いつがいい？

雨ヶ谷 いま！

北斗 テストが終わってからがいいんじゃない？

雨ヶ谷 もっと早く。すぐ。いま！

北斗 いま？

雪村 むりだよ、雨ヶ谷。

雨ヶ谷 じゃ、あした？

雪村 学校があるでしょ。

雨ヶ谷 それが何？

二反田 だいぶ生き急いでるね、雨ヶ谷さん。

悠里 せめて土日にしよ？

雨ヶ谷 一週間先なんか永遠の未来！ この気持ちがほどける前の、いま。

時恵 初期衝動、えぐ。

雪村 雨ヶ谷、みんな困っちゃうから。

雨ヶ谷 じゃあいつ？ 何月何日？

雷音寺 またあとで考えよう。みんな来てから。

雨ヶ谷 何月？ 何日？ 何曜日？

雪村 落ち着け。雨ヶ谷。

雨ヶ谷 いつにするの？ ねえ？ いつ？ 春？ 夏？ 秋？ 冬？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ いつ？ ねえ？

窓際の席で、悠里が、

悠里 あ。

時恵 え？

悠里 あれ。何？ 落ちる……。え？

雨ヶ谷 いつにするの？ ねえ！

衝撃波が届く。轟音。教室が揺れる。

2

同時刻。

川沿いの土手だろうか、梅田が歩いている。

彼女の視界に波江の姿が映る。

波江 遅かったね。

梅田 え？

波江 もう間に合わない。遅刻だよ。

梅田 うん。寝坊したから。

波江 寝坊したんだね。どうして？

梅田 ……。

波江 どうして？

梅田 え、しゃべるんだ、波江くん。

波江 ずっとしゃべっていたよ。

梅田 え？

波江 聞こえなかったただだよ。

梅田 ……。

波江 ……いや、ちがうか。いまのは間違った。変だね。変だ。そう。うん……。学習をしていたんだ。

梅田 何？

波江 おおよそのことはわかった。もう話ができる。だいじょうぶだよ。しゃべれる。ねっ？

沈黙。

梅田 行かないとだね。行こ。

波江 待っていたんだ。

梅田 わたし？

波江 うん。

梅田 なんぞ？

波江 ……。

梅田 なんぞ？

波江 きみだったんだ。

梅田 は？

波江 きみだったんだよ、もっとも深いところで血を流したのは。

梅田 わからないな、よく。

波江 しるしがあったはずだよ。

梅田 ねえ、もう遅刻だから。行こ？

波江 取り戻さなくてはいけない。慎重に。

梅田 なんの話をしているの？

波江 ずっと見ていた。

梅田 は？

波江 観察していた。ずっと、近くにいるということはわかっていた。それが誰なのかが、わからなかった。
きみだった。

沈黙。梅田が波江をよけて、歩きます。

波江 待つてよ。話をしよう。

梅田 何の？

波江 何がいい？

梅田 わたしは話したくない。

波江 何でもいいんだよ。

梅田 話したいのは波江くんでしょ？

波江 でも決めてもらわないと、何を話すか。

梅田 話したくないよ、わたしは。

波江 わかった。何から話せばいい？

梅田 わかんない、わかんない、その思考回路がわかんない。

波江 話をしてよ、ほら。

梅田 こわいんだけど、波江くん。

波江 こわい？ ぼくが？

梅田 止まって。そこで止まって。動かないで。

波江 どうして？

梅田 ついてこないですよ。

波江 おれだって、学校に行くんだよ。

梅田 (指さして) 先に行つて。

波江 どうして指示をされなければいけない？

梅田 波江くん、気づいている？ 自分がとても気持ち悪いって。知らなかった。

梅田 救いようがないね。(再び歩きだす)

波江 (少し遅れて追いかけて) 気持ち悪い、ぼくは？

梅田 そうだね。でも気持ち悪くない人間なんていないから。

波江 きみも？

梅田 ひどいものだよ、わたしは。

波江 そんなことないと思う。

梅田 それはどうも。

波江 ねえ。

梅田 ……。

波江 ねえ。

梅田 ……。

波江 どうして無視をするの？

梅田 ……。

波江 あれ？ 待って。ちょっと待って。

梅田 ……何？

波江 (胸に手をあてて) 心臓が変だな。不規則だ。

梅田 ……。

波江 ぼくの言葉が届かない。きみがふりかえってくれないと、心臓がおかしな動きになる。どうして？

梅田 なんなの？

波江 わからない。知りたいんだ。なにが起こっているのか。もっと、ぼくたちのこと。

梅田 わたし、きらいかもしれない、波江くんのこと。

波江 それはどうも。

梅田 さようなら。

梅田が去る。

波江がひとり佇み、空の広がりを見上げる。

やがて、彼女の後を追いかけていく。

3

教室。

三谷が教室の片隅でノートをめくる。

小熊が三谷の背後で、立ち止まった。

小熊 おはようございます。

三谷 あ、……おはよう。

小熊 失礼ですが。その文字列は、何が記されているのですか？

三谷 (慌てて) 何でもないよ。

小熊 そうですか。

三谷 うん。

小熊 小説ですか？

三谷 えっ？

小熊 ちがいますか？

三谷 ちがう、ぜんぜんちがう。

小熊 失礼かとは思ったのですが。どうしても気になって。

三谷 ちがうから、ほんとに。

小熊 なんですか？

三谷 えっ？

小熊 何を書かれているのですか？

三谷 予習だよ、授業の。

小熊 今日は授業があるのでしょうか？

三谷 えっ？

小熊 もしかしたら、このまま帰ることになるかもしれないですね。

三谷 うん……。緊急避難先に指定されたんだっけ、学校。

小熊 はい。自衛隊の車両が集まっています。次から次に。

三谷 大きすぎだよな、なんだか。

小熊 何事もなければよいのですが。

三谷 ないよ。……たぶん。

四宮に本を差しだす時恵。

時恵 四宮さん。ありがとう、これ。

四宮 もう読んだの？

時恵 うん、止まらないよ、ページをめくる手が。

四宮 よかった。気に入ってもらえて。これ、次の巻。

時恵 ありがとう、やった。すぐ返すから。

四宮 ゆっくりでいいよ。

「こわいよね、自分がこんな状況に立たされたら」、「できない、できない。ひとりで世界背負うとか」などと二人の話が
続く。

船見、島貫、岸辺の三人が、

岸辺 やっぱ興奮するよな、ああいうの。ずらって並んでると。

島貫 小学生かよ。

岸边 戦車ってはじめに見たよ、うち。

船見 なんで武装してるんだろな、あれ。

岸边 武装？

船見 隕石でしょ、落ちたの。武装する必要あるか？

岸边 もしかしたら、ミサイルだったんじゃない、どっかの。

島貫 隕石じゃなくて？

岸边 そう。敵襲の可能性。

船見 え、それっておれら、ここにいるの危なくない？

島貫 確実に巻き込まれる距離。

岸边 最前線に立っちゃったね。

時恵が自分の席に向かう。

時恵 桜丘、足じゃま。

桜丘 わり。ちよつと長すぎるところあるから、おれの足。

時恵 うん、空間に占める体積の割合がひどいよね、それ。

桜丘 あげないよ。

時恵 いらないよ。

そのやりとりを眺めていた悠里が、

悠里 桜丘って、この辺だけ、家？

桜丘 そう、徒歩圏内。

悠里 だいじょぶだった？ 隕石。

桜丘 ……なんかよく覚えてないんだよな。

時恵 覚えてないって何？

桜丘 いつ落ちたんだっけ？

時恵 真夜中でしょ、たしか。

悠里 え、昼間じゃなかった？

時恵 昼はだって、学校あるでしょ。

悠里 あれ、そっか。

桜丘 わかんねえな、なんだか。

悠里 へんなの。

時恵 うん。

悠里 (窓から空を眺め) 今日も青いね、空が。人の気も知らないで。

教室の外から、松本と杉谷の声が聞こえてくる。

杉谷 おまえ、どうしてこんなときに肝心の一步を踏みだせない！

松本 遅刻するから。

杉谷 こんな機会は二度とないぞ。すぐそこに。宇宙からの飛来物が。

松本 近づけないよ、どうせ。

杉谷 わからないだろ、行ってみなければ。

松本 ひとりで行きなよ。

そう言われて無然とする杉谷。教室に入る。松本が追いかけて、

松本 ……寄るんだったら、帰りに寄ろ。

杉谷 ……。

松本 杉谷？

杉谷 (そっけなく) 話しかけないでくれる？

桜丘 おはよう、松本。

松本 ……おはよう。

二反田が「おはよう」と口にして教室に入る。

周囲の者が口々に「おはよう」と返す。「今日、風強くない？ 髪の毛やば」などと口にしながら、

二反田 おはよう、四宮さん。

四宮 おはようございます。

二反田 (見まわして) あれ、梅田さんは？

四宮 梅田さん？ まだみただけ。

二反田 打ち合わせする約束なのに、世界史の発表。

桜丘 寝坊だろ。

二反田 寝坊？

桜丘 たまにやるんだよ、あいつ。(あくびをする)

二反田 ふうん。(荷物を置き、一度教室を出る)

蟹江が寝息を立てている。

その傍らに山羊沢が立つ。

山羊沢 蟹江。

蟹江 ……。

山羊沢 蟹江。

蟹江 ……。

山羊沢 蟹江。蟹江。蟹江。

蟹江 ……え？

山羊沢 日直だろ、今日。学級日誌。(差しだす)

蟹江 (受け取り) ……夢を見た。

山羊沢 どんな？

蟹江 忘れた、ぜんぶ。

山羊沢 寝言言ってたぞ、蟹江。

蟹江 言ってる。

山羊沢 世界が終わる。

蟹江 言ってる！

山羊沢 言ってたんだから。

蟹江 聞いてんじゃねえよ、人の寝言。気持ちわるい。

山羊沢 なに荒ぶってんだよ。

北斗がやってくる。

北斗 おはよう。

山羊沢 あ、おはよ。

北斗 けんか？

山羊沢 え、うん、なんか……。わかんないよ。

霧崎を囲んで、雨ヶ谷、雪村、雷音寺、嵐山が教室に入る。

嵐山 山羊沢。山羊沢。

北斗 呼ばれているよ。

嵐山 なあ、山羊沢。おまえも来いって。

山羊沢 何？

雨ヶ谷 海！ 別荘！ この世の果て！

山羊沢 この世の果て？

雪村 霧崎さんの別荘、海辺にあるんだって。

山羊沢 えっ、別荘？

「別荘？」「すげっ」、「いいな」など、周囲の席の者が、その言葉に反応する。

雷音寺 計画立ててんの、みんなで。別荘襲撃。

霧崎 襲撃はしないで？

雨ヶ谷 最果ての別荘！

嵐山 行こうよ。海だよ！

二反田 (戻ってきて) 海？

雨ヶ谷 霧崎の別荘。二反田も来い。

霧崎 うん、よかったら。

二反田 霧崎さん、何、ご令嬢なの？

雨ヶ谷 そうだよ！ 霧崎はすごいんだよ。

霧崎 わたしはすごくないんだよ、雨ヶ谷さん。

雷音寺 いや、もうすごいよ、国家レベル。

霧崎 雷音寺、ちょっと！

二反田 え、いいの？ わたしも？

霧崎 もちろん。

雨ヶ谷 みんなだ。みんな。山羊沢も、蟹江も。(船見や桜丘、三谷に) おまえも、おまえも、おまえも！

三谷 何？

桜丘 おれも？

船見 えっ、おれも？

岸边 いいの？

雪村 ちよっと、雨ヶ谷。全方位にご迷惑でしょ。

雨ヶ谷 (霧崎に) 迷惑？

霧崎 うちは何も。

桜丘 どんな海？

霧崎 静かな海だよ。裏庭の階段をおりると、浜辺につながっているの。

二反田 そんな世界観が実在するの？

霧崎 外からは誰も入ってこれない。

桜丘 すげえな、それ。

嵐山 うちのクラス、全員で行こうぜ。

雨ヶ谷 もう来い。来い。来い。みんな、来い！ おまえも、おまえも、おまえも！（最後に四宮を指す）

四宮 わたしは、いい。

雨ヶ谷 なんで！

四宮 泳げないから。

雷音寺 いいよ、泳げなくって。海を眺めるだけでも。

四宮 （静かに首をふり）いい。

北斗 小熊さんも行く？

小熊 いえ、わたしは。そんな大人数でお邪魔をしてはご迷惑では？

雷音寺 平気だよ、へたするとあそこ学校より広いし。

霧崎 それはない。

雷音寺 身一つでおいでよ。そろってるから、ぜんぶ。

北斗 いつ行くの？

雨ヶ谷 いま！

北斗 いま？

二反田 だいぶ生き急いでるね、雨ヶ谷さん。

雨ヶ谷 一週間先なんか永遠の未来！ この気持ちがほどける前の、いま。

時恵 初期衝動、えぐ。

悠里 まあ、学校あるかわかんないしね、今日。

教室の片隅で、

山羊沢 どうする、蟹江。

蟹江 わたしはいい。

山羊沢 おまえ行かないなら、いいや。

蟹江 は？

その時、二反田が、

二反田 ちょっと待って、なんか。……変なおいしな？

四宮 におい？

三谷 うん、する。

島貫 ほんとか。

桜丘 おれ？

二反田 いや、魚の腐ったような。

桜丘 え、おれ？

時恵 え、桜丘そんなにおいするの？

杉谷 隕石じゃないのか。

松本 隕石？

杉谷 隕石から煙がたちのぼっているっていう話だろ。

北斗 水蒸気だっけ、なんか。

杉谷 ものすごい高熱で、どんどんまわりを溶かして、地下に沈んで。地球の核に達したら、人類が滅亡するんだ。

松本 そうなの？

北斗 (重なって) え、そんな危機的状況なの？

桜丘 (重なって) どういう隕石、それ。

岸边 (手を挙げて) 今朝、バスで言ってた、知らない人が。あの煙を吸ったら、肺にカビが生えたり、脳を溶かされたりするって。

小熊 皆さん、不確かな情報は……。

船見 (聞かず) え！ じゃあ、やばいでしょ、ここ。

島貫 いまさらじゃない？

小熊 不確かな情報の拡散は、控えましょう。

雨ヶ谷 いつ行くの？

二反田 やだな、このにおい。

三谷 窓閉めて、窓。

雨ヶ谷 ねえ。

悠里 閉まってるよ。

時恵 このにおい、何？

桜丘 これは、おれじゃないな。

時恵 わかってるよ。

雨ヶ谷 いつ？ 何月何日？

二反田 げげげ、吐きそう。におい強くなってる？

桜丘 口んなか、ピリピリする。

雨ヶ谷 何月？ 何日？ 何曜日？

北斗 (鼻をおさえて) なにか近づいてきてない、これ？

三谷 (鼻をおさえて) 隕石が割れて、中から宇宙人出てきちゃったとか。

二反田 (鼻をおさえて) なに言ってるの、ばかじゃないの。

雨ヶ谷 いつにするの？ ねえ？ いつ？ 春？ 夏？ 秋？ 冬？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ いつ？ ねえ？

鼻をおおい、咳込む者が続く。

霧崎、雪村、雷音寺、嵐山は無表情のまま。

遠く、発砲音が響く。窓の向こうを眺めていた悠里が、

悠里 あ。

時恵 え？

悠里 (窓外を指さして) ねえ、ちょっと、あれ……。

時恵 ……うそ。

雨ヶ谷 いつにするの？ ねえ！

窓の外で、爆撃音。

迫撃砲が連続して撃たれる。閃光。窓が破れる。

教室に悲鳴が満ちるかもしれないが、それすらもかき消される。

4

同時刻。

梅田が歩いている。彼女の視界に波江の姿が映る。

波江 やあ。

梅田 え？

波江 おはよう。

梅田 おはよう。……え、しゃべるんだ、波江くん。

波江 うん。しゃべるよ。そう。しゃべる。

梅田 どうしたの？

波江 寝坊したんだ。そうだね、うん。はは。寝坊。

梅田 わたしも。遅刻しちゃうね。行こ。

波江 うん。

連れ立って、歩きだす二人。

波江 いい天気。とてもいい天気。とてもいいね、とてもね。

梅田 そうだね。

波江 学校は無事かな。

梅田 え、何で？

波江 いや。なんとなく。

梅田 へんなの。波江くん、爆弾でも仕掛けた？

波江 そんなことしないよ。

梅田 すればいいのに。

波江 どうして。

梅田 なんとなく。

沈黙。

波江 梅田さん。ぼくらが心で思ったことは、どこかの世界で実現するんだ。

梅田 独特だね、波江くんって、なんか。

波江 気持ち悪いっていうこと？

梅田 そんなこと言ってないけど。

波江 それはどうも。

沈黙。

波江 どういえばいいか、わからないのだけど。

梅田 うん。

波江 真剣な話なんだ。

梅田 ……うん。

波江 きみたちにはまだ観測できない領域から、やってきたんだ、ぼくは。

梅田 うん？

波江 きみは取り戻さなくてはいけない。いま。真剣に。とても慎重に。

梅田 なにを？

波江 きみの心の奥に、巨大な穴がある。百三十億光年彼方の、赤色巨星の銀河団をも飲みこむほどの。

梅田 なに、なに、なに？

波江 その穴を埋めるんだ。そうしないと、ぼくたちの種族が減びてしまう。

梅田 待って、わからない。

波江 それを回避するために、ぼくは。

梅田 何の話？

波江 やってきたんだよ、ここに。ずっと先の未来から。

沈黙。

梅田 ……は？

波江 きみの遠い未来の子孫が、きみのこどもの、こどもの、こどもの、ずっと遠くの未来にいるきみのかけらが、ぼくたちをいつか滅ぼす。ぼくの家族を殺す。むごたらしく。感情もなく。徹底的に滅ぼす。

梅田 それって物語か何か？

波江 ちがうよ、現実の話。本当の話。未来の話。

梅田 未来。

波江 きみの血が滝のように流れ落ちる、きみ自身の巨大な穴に。流れ流れたその血が、いつかぼくたちを滅ぼす。そのように決まっている。

梅田 そんなの知らないよ。

波江 そう、きみは知らない。

梅田 意味がわからない。

波江 可能性の話だよ。この世界はそうではない世界になるかもしれない。ぼくはそれを探っているんだよ。

梅田 何が何だか。

波江 大丈夫。いっしょに探そう。力を合わせて。

波江が手を差しのべる。その手を異物のように見て、

梅田 こわいんだけど、波江くん。

波江 こわい？ ぼくが？

梅田 止まって。そこで止まって。動かないで。

波江 どうして？

梅田 ついてこないですよ。

波江 おれだって、学校に行くんだよ。

梅田 (指さして) 先に行つて。

波江 おちついて、ちがう、こんなことをしている場合じゃないんだ、ぼくたちは。

梅田 来ないで！

梅田が去る。

波江がひとり佇み、顔を覆って吐息をつく。

やがて、彼女の後を追う。

5

教室。

遠くで常に銃声、砲声。

外を戦闘機が飛び交っている様子。つんざくような不協和音の警報音。

三谷が教室の片隅でノートをめくっている。小熊がその背後に立つ。

小熊 おはようございます。

三谷 あ、……おはよう。

小熊 失礼ですが。その文字列は、何が記されているのですか？

三谷 何でもないよ。

小熊 そうですか。

三谷 うん。

小熊 小説ですか？

三谷 ……そうだよ。

小熊 三谷くんのお書きになったものですか？

三谷 うん。

小熊 そのような才能をお持ちだったのですね。

三谷 小熊さん、何、どうしたの？

小熊 三谷くんは勇敢な人なのですね。

三谷 なんて？

小熊 おのれを言葉のなかに解き放つことができる。

三谷 いま書いておかなければさ。わからないだろ、いつ、どうなるか。

小熊 そうかもしれませんね。

爆撃音。

四宮に本を差しだす時恵。

時恵 四宮さん。ありがとうございます、これ。

四宮 早かったね。

時恵 うん、本を読むくらいしか、できることないし。

四宮 これ、最後の巻。

時恵 ありがとう。大事に読む。

四宮 うん。

船見、島貫、岸辺の三人が、

船見 これ、何とたたかっているの？

岸辺 知らんがな。

船見 なんで攻撃されてんの、おれたち。

島貫 知らんって。

岸辺 波江、だいじよぶかな。

船見 ここだって、危ないよ。

岸辺 そうだけど。

船見 ま、おれら無敵だから。

島貫 震えてるじゃないか、船見。

船見 武者震いだよ。

悠里が教室内を見まわす。時恵が自分の席に着く。

悠里 三谷、ちよつと。

三谷 なに？

悠里 桜丘は？ 朝練、一緒でしょ？

三谷 今日、朝練なかったから。

悠里 そうなんだ。

時恵 なんで？

悠里 いや、遅いなと思って。なんか、違和感。

二反田が「おはよう」と口にして教室に入る。

周囲の者が口々に「おはよう」と返す。

二反田 おはよう、四宮さん。

四宮 おはようございます。

二反田 橋が破壊されて、迂回してきた。

四宮 よかった、たどり着けて。

二反田 うん。(教室を見まわして)……さすがに少ないね、人。

四宮 そうだね。

蟹江が寝息を立てている。

その傍らに山羊沢が立つ。

山羊沢 蟹江。蟹江。蟹江。

蟹江 ……何。

山羊沢 学級日誌。(差しだす)

蟹江 意味ある、それ？

山羊沢 だって、日直だし、おまえ。

蟹江 ……状況を鑑みろよ、日直とか言ってる場合？

山羊沢 それいつたらさ、なんで学校来てんだよ。

蟹江 そうだよな。

山羊沢 ん？

蟹江 どうしてわたしたち、ここにいるんだろ？

山羊沢 ……学校があるからだろ。

沈黙。

山羊沢 寝言、言ってたぞ。

蟹江 世界が終わる。

山羊沢 え？

蟹江 世界が終わる。

教室に駆け込んでくる者たち。

意識を失った松本を、桜丘と北斗が担いでいる。杉谷が寄り添う。

悠里 どうしたの？

時恵 なに？

北斗 どいて。

杉谷 急いで。慎重に。ゆっくり。

床に寝かされる松本。仁王立ちで杉谷が見守る。

桜丘 松本？ 松本、わかるか？ おい。

北斗 (脈をとりながら、呼びかける) 松本くん。

船見 ちよ、なに？

三谷 保健室は？

桜丘 いないよ、先生なんか。

二反田 いないの？

小熊 わたし、誰か。(教室を出ていく)

北斗 脈がとれない。

桜丘 まずいな。おい、松本。

悠里 ねえ、どうしたの？

杉谷 吹っ飛んでったんだ、遠くまで。

北斗 全身ぶつけてる。

桜丘 頭だ、あたま。

二反田 脳震盪ってこと？

四宮 脳震盪って、動かしたらいけない！

北斗 巻き込まれるから、あそこにいたら。

杉谷 花が、根こそぎやられていた。こいつの、育てていた花。

三谷 花？

二反田 花ってなに？

すぐ近くで爆撃の音。悲鳴。皆、身を寄せ合う。

悠里 もう、やだ……。

船見 泣くな、島貫！

島貫 泣いてねえよ！

山羊沢 え、何とかなるよね、これ。大丈夫だよね？

蟹江 知るかよ。

岸边 漏らすなよ、船見！

船見 漏らしてねえから！

小熊が教室に入る。顔面蒼白で、

小熊 皆さん！ 校舎内に。武装勢力が！

桜丘 は？

北斗 え、助けに来てくれた？

小熊 そういう様子ではなく……。

ぞつとするほど近くで、破壊の音。

怯える人々。おそらくは校舎が直接、攻撃を受けている。

北斗 に、逃げる？

三谷 どこへ？

島貫 どこ逃げたって、だって、いま……。 (窓の外を指さす)

二反田 (横たわる松本を眺めながら) いま、ここにいないやつって……。

四宮 (制しようと) 二反田さん。

二反田 たどり着けなかったってこと？

互いの顔を見わたして、

北斗 誰が来てない？

桜丘 おれ、行ってくる。

三谷 よせ、桜丘。

桜丘 行ってくる。

三谷 おまえが行って、どうなるんだよ。

桜丘 そこまで来てるかもしれないだろ、なあ？

三谷 だったら入ってくるって！ 待ってろ、ここで。

桜丘 ……ちくしょう！

そのとき、目を覚ました松本が、

松本 杉谷。

杉谷 松本。

松本 魔術は？

杉谷 しゃべらないでいい。

松本 いまこそ魔術じゃないの？

杉谷 ……未熟なんだよ、わたしも。

ふいに静寂が訪れ、霧崎、雨ヶ谷、雪村、雷音寺、嵐山が教室に入ってくる。

嵐山 山羊沢。山羊沢。

北斗 ……呼ばれているよ。

山羊沢 え？

嵐山 なあ、山羊沢。おまえも来いって。

山羊沢 何？ え？

雨ヶ谷 海！ 別荘！ この世の果て！

山羊沢 この世の果て？

雪村 霧崎さんの別荘、海辺にあるんだって。

再び、戦争の音。霧崎たちが自分の席に着く。

雷音寺 計画立ててんの、別荘襲撃。

霧崎 襲撃はしないで？

雨ヶ谷 最果ての別荘！

嵐山 行こうよ、海だよ！

沈黙。

二反田 ねえ、三谷。

三谷 なに？

二反田 (霧崎たちを示して) こいつら、誰？

三谷 誰って、ほら……。あの。……あれ？

霧崎 静かな海だよ。裏庭の階段をおりると、浜辺につながっているの。外からは誰も入ってこれない。

嵐山 うちのクラス、全員で行こうぜ。

雨ヶ谷 もう来い。来い。来い。みんな、来い！ おまえも、おまえも、おまえも！

二反田 え、誰、この人たち？

岸边 え？

桜丘 誰って……。

二反田 となりのクラス？

霧崎 何言ってるの、二反田さん。

二反田 え？

霧崎 え？ 霧崎だよ、霧崎。

二反田 わかる？

三谷 あれ、あ、ごめん、えっと。

二反田 ねえ、山羊沢。

山羊沢 いや、その。

四宮 ……わからない。

人々が言葉を失う。

二反田 いたっけ、こんなやつら。

霧崎、雪村、雷音寺、嵐山が立ち上がる。微笑んだまま。

言葉は途切れ、戦争の音だけが響く。

雨ヶ谷 ねえ！ 行こうよ！

小熊 ……ど、どこにですか？

雨ヶ谷 (答えず) いま！

雪村 そうだね。

嵐山 行こうか。

雷音寺 行こう。

霧崎 時間だよ。(窓の向こうを指し示す)

唐突に、静寂。

悠里が窓の向こうを見て、

悠里 あ。

時恵 え？

杉谷 外が。真っ暗。

悠里 ……なにこれ。

やがて大きな震動が教室を揺るがす。

皆、平衡を崩し、世界が凍りつく。

6

同時刻。

梅田が歩いている。彼女の視界に波江の姿が映る。

梅田 波江くん？

波江 うん。

梅田 どうしたの？

波江 こんなに空が青いから。

梅田 うん。

波江 さぼってしまおうかと思った。

梅田 だめだよ、さぼりは。

波江 そうだね。反省している。

梅田 (少し笑って) 何それ。

波江 うん。寝坊したんだ、ほんとは。

梅田 わたしも。……遅刻しちゃうね。行こ。

連れだって歩きだす二人。

梅田 しゃべるんだね、波江くん。

波江 しゃべるよ。

梅田 そのほうがいいよ。なんか。自然だよ。

波江 それはどうも。

沈黙。

波江 これはね、物語だよ。いまから話すことは。

梅田 物語？

波江 そう。ぼくは人間ではない。

梅田 波江くんは人間ではない。

波江 ぼくは人間のことを学ぶために、知るためにやってきた、ここに。ずっと遠くの未来から。

梅田 へんなの。

波江 へんだよね。でも、引き受けなければいけない、誰かが。

梅田 そうなんだ。

波江 うん。

梅田 学べた？ 人間のこと。

波江 うん。……まだわからない。

梅田 ゆっくりでいいよ。

波江 うん。

沈黙。

波江 ぼくたちは滅びるんだ。人間によって。

梅田 そうなの？

波江 それを回避したい。

梅田 そのために学んでいるの、人間のこと？

波江 そう。でも難しいよ。失敗ばかり。

梅田 そっか。

波江 ぼくたちの種族は、痛みも、血を流すという概念もないから。

梅田 へえ。変わってるね。

波江 そうかな？

梅田 滅ぼされたんでしょ、人間に。それなのに痛みはないの？ 憎しみは？

波江 ないよ、まったく。ただ、それが間違ったことだということとはわかる。だから、何とかしたいと思う。

梅田 わかる気がする、そういう感じ。

波江 え？

梅田 自分が遠く離れた場所にいる感じ。どこか別の場所で血を流している。わたしには関係ないところで。

波江が立ち止まる。

波江 いつか、世界が終わるんだ。きみたちの手によって。

梅田 え？

波江 ぼくたちは滅ぼされる。きみの、いま抱えている悲しみが、ずっとずっと遠くの子孫にまで受け継がれて、ぼくを滅ぼす。

梅田 どういうこと？

波江 だから、取り戻さなくてはならない。きみのうしなったものを。

梅田 きみってやめてよ。

波江 梅田さん。

梅田 うん。

波江 どうしたら信じてもらえるんだろう？

梅田 何を？

波江 何でもない。

沈黙。

梅田 わからないけど。味方になってあげるよ。

波江 梅田さんが？

梅田 うん。たとえ波江くんがいつか憎しみという感情を覚えて、人間を滅ぼそうとしても。

波江 すごいね。

梅田 すごくないよ。ふつうだよ。

波江 そっか。

梅田 行こ。猛烈な遅刻だ、これ。

梅田が歩きだす。

波江、その背を見つめ、やがて後を追う。

教室。

波音。

床に散らばる落ち葉。

窓の向こうを眺める悠里。本を読んでいる時恵。

三谷の席にノートが置かれている。

蟹江が眠っている。

船見、島貫、岸边が沈黙考の風情。

北斗がトングとバケツを持ち、立っている。

やがて落ち葉を拾い集める。その様子を山羊沢が眺めている。

北斗 拾っても、拾っても、いつの間にか落ちているから。

山羊沢 ……うん。

北斗 誰かがやらないとね。すべっちゃうしさ、踏んだら。

山羊沢 代わろうか？

北斗 いいよ。大丈夫。

山羊沢 どこから降ってくるんだろ、これ。

北斗 蟹江さん、様子は？

山羊沢 寝ている。変化なし。

北斗 心配だね。

山羊沢 (呼びかける) 蟹江、蟹江。蟹江……。

蟹江は眠ったまま。

北斗 どんな夢、見ているんだろ。

山羊沢 ……うん。

四宮に本を差しだす時恵。

時恵 四宮さん。ありがとう、これ。

四宮 いいよ、持ってた。

時恵 もう何度も読んだから。

四宮 (受け取り) 物語の終わりだけ何度も繰り返すって、寂しいね。

時恵 ね。飽きちゃった。何か、ないかな。新しい物語。

四宮 (三谷の席をちらりと見て) 書いているかもしれない、誰か。

時恵 書く? 誰が?

四宮 さあ。

船見。島貫、岸辺の三人が、

船見 何日経ったと思う、あれから。

岸辺 あれからって、どれから？

船見 あれからは、あれからだろ。

島貫 わからんよ。時計も止まってるし。

岸辺 年単位かもしれない。

島貫 なんてこっただな。

時恵が席に戻る。悠里が窓の向こうを見て、

悠里 真っ暗だな、窓の向こう。

時恵 暗黒だね。

悠里 空ってどんな色してたっけ？

時恵 ずっとこうだったんじゃない？

悠里 ずっと？

時恵 うん。お先真っ暗。

小熊 三谷、桜丘、二反田が教室に入る。

二反田 ただいま。

四宮 遅かったね。

二反田 うん……。

小熊と三谷が皆の前に立つ。

小熊 皆さん。第二百十七回、校外調査報告をはじめます。

三谷 はじめます。

小熊 一点目。波打ち際に変化はありません。あいかわらずまっすぐ、ひたすらまっすぐ続いています。二
点目。杉谷さんと松本くんがいなくなりました。

四宮 いなくなった？

小熊 はい。わたしたちが目を離れたすきに。

桜丘 影もかたちもないんだよ。

三谷 けむりのように。消えてしまった。

時恵 どういうこと？

悠里 消えるって何？

小熊 飲みこまれたのかもしれませんが。暗闇に。

島貫 それって、どうなっちゃうの？

船見 さあ。

北斗 え、どうする、探しに行く？

岸边 暗闇のなかを？

小熊 危険だと思います、わたしは。

北斗 ほっといいいの？ だめでしょ？

小熊 わたしたちも二の舞になるかもしれません。

北斗 助けを待ってるかもしれない。

小熊 だとしても慎重にならなければなりません。

二反田 実際、むりでしょ。何度呼びかけても、反応なかったから。

北斗 ……いつまでも、ここでこうしていても、状況は変わらないよ。

船見 うん、たしかに。

小熊 ここは次元の異なる世界です。何が起こるか、わからないんです。

船見 うん、たしかに。

岸边 おまえ、なんか言えよ、自分の意見。

船見 いや、すごいなって、いろいろ考えてて。

三谷 杉谷さんと松本くんが、自分の意志で暗闇に飛び込んだならいいよ。でも、暗闇のほうが侵食してきてたのだとしたら？

二反田 お？

三谷 暗闇が二人を捕まえたんだとしたら。あれが、意志をもった暗黒だとしたら。

窓の向こうを眺める人々。

二反田 冗談じゃねえって。

小熊 憶測で話すのはやめましょう。

時恵 憶測以外に話せることなくない？

桜丘 少しずつ、連れて行かれるってこと？

島貫 そして誰もいなくなった。

小熊 おやめなさい、不吉なことを。

悠里 (窓の向こうを眺め) あの向こうに、何があるの？

三谷 なにもないのかも。

桜丘 無？

船見 こわ。

小熊 皆さん。わたしたちはいま、四方を囲う暗闇に閉ざされています。この閉ざされた世界で、どうにかして生き延びていかなければなりません。そのためには、力を合わせる必要があります。

悠里 さすが学級委員……。

時恵 どうやって？

小熊 冷静になりましょう。やみくもな行動を起こさないようにしましょう。議論をしましょう。わたした

ちの未来について。

四宮 未来なんて、あるの？

二反田 ええ？

四宮 いつまでも同じ一日。寄せては返す波のように。

波音がしのび寄る。

二反田 ……四宮氏。これはついにわれわれ人類みな平等に暗黒神の住みたもう領域に拉致されたということでありましょうか？

四宮 人類平等っていうのはちがうんじゃない、わたしたちしかいないんだから。

二反田 ばっからしくなりましたよ、わたしはなんだか。もうどうでもいいですよ。白旗ふりふりです。と
ほほのほ。

桜丘 え、どうしたの？

四宮 いえ。

二反田 かなうわけじゃないじゃないですか、外宇宙に住みたもう暗黒の神々ビ・ロン・ビロリ・ンビロビ・ロ
ーンどもに、われら単なる人間っぽっちが。

桜丘 なに言ってるの？

二反田 (食ってかかる勢いで) しおしおのしおですよ！

四宮 (押しとどめつつ) おかまいなく……。

三谷 ……おれは小熊さんに賛成。慎重になるべきだよ。わからないことが多すぎる。

小熊 ですから、わかることを一つずつ積み上げましょう、いまは。

悠里 わかることって、何？

北斗 何か、手がかりになることとか。

時恵 手がかりつつたつたって……。

三谷 蟹江さんが、寝言を言ったろ。

北斗 波江くんの声で。

岸边 そう。波江の声で。

時恵 寝すぎて喉、おかしくなったんじゃない？

島貫 いや、あれは波江だった、ぜったい。

船見 なんて言ったんだっけ？

山羊沢 きみたちには心がある。

沈黙。

山羊沢 おそれるな。……って。

悠里 あいつ。何者だよ。

時恵 異世界人？

岸边 まさか。

三谷 夢の回路を伝って、届けようとしてくれているのかもしれない、何かを。

北斗 おそれるなって言ってるんだから。飛び込んでみるのがいいんじゃないかな。

小熊 いえ、それこそ本当に波江くんの声なのか、わかりません。

島貫 波江だよ、

小熊 声はそうかもしれませんが……、

桜丘 これ、三谷の？

桜丘が三谷の席からノートを拾いあげる。

そのページを開くと、教室の情景が静止。

波音が高まる。

波打ち際を杉谷と松本が歩いている。

松本 帰ろう、杉谷。

杉谷 帰るんだよ、松本。もといた場所に。

松本 心配しているよ、みんな。勝手にこんなことして。

杉谷 わたしたちを取り巻く、この暗闇は、どこにつながっているんだろう？

松本 わかるわけないだろ、ぼくに。

杉谷 走りだしてみようよ。

松本 やめなよ。

杉谷 どうして？

松本 戻ってこれなくなる。

杉谷 いいだろ、それならそれで。

松本 よくない。

杉谷 どうして？

松本 ……あ、あぶないだろ。

杉谷 行ってくる。

松本 一步踏みだしたら、落っこちてしまうかもしれない。

杉谷 大丈夫。

松本 二度と戻れない。

杉谷 大丈夫だ。

松本 何もないかもしれない。

杉谷 ぜったいに大丈夫。

松本 地面があるってかぎらないんだよ。

杉谷 大丈夫。生まれる。信じろ。

松本 杉谷。

杉谷 ずっと考えていたんだ。あとは信じるだけなんだよ、松本。

松本 信じる？

杉谷 松本。魔術の本質を教えてやる。それは言葉だ。

松本 ……言葉？

杉谷 空中に火を灯すことが魔術ではない。空中に火を灯すことのできる何者かに働きかけること、それが魔術だ。そのための呪文。そのための言葉だ。

杉谷が身をひるがえし、

杉谷 (魔法をかける気迫で) 松本。走れ。わたしを、捕まえてみせろ。

松本 止まって。杉谷。

杉谷 走れ！

松本 止まって。

杉谷 いいから！ 走れ！

走りだす杉谷。追いかける松本。

教室の情景が動きだす。桜丘がページをめくって、

桜丘 (ノートを読み上げる) どこにだってたどり着ける、光より速く進めば。

三谷 ばっ……、何やってんだよ！

桜丘 (感心したように) へえ。

三谷 返せよ！

桜丘 おまえ、こんなの書いてるのか。

三谷 返せって！

二反田 なに、三谷氏、なに？

桜丘 (ノートを読み上げる) どこにだってたどり着ける、光より速く進めば。

三谷 やめて！

桜丘 (ノートを読み上げる) その力がある、ぼくたちは。どこにだってたどり着ける。

三谷 読み上げないで！

桜丘 (ノートを読み上げる) そんなのはうそだ。光より速くなんて進めない。わたしたちは人間だから。

三谷 桜丘！

桜丘 (ノートから視線を外して、期待に満ちて) 続きは？

三谷 ……返して。

桜丘 この後は？

三谷 しらないよ。

桜丘 この後だろ、大切なのは！

北斗 (ノートを覗き込み) なに、どういう状況のせりふ？

三谷 ちよ、

桜丘 これ、主人公が異次元の世界に漂流して……。

三谷 説明やめて！

北斗 筆圧がすごいね。

時恵 (覗き込み) うお、びっしり。

二反田 (覗き込み) 立ちのぼる香気。

悠里 見せて。

小熊 よしなさい、人の表現物を勝手に盗み読むなんて犯罪ですよ。

時恵 小熊さん、ちよつと、しつ。

小熊 しっ？

ノートが回し読みされる。

三谷 (身もだえして) お、お、お、お！

小熊 (その三谷を示して) ほら！ 人を辱める行為はおやめなさい。

北斗 (ノートを読み上げる) どこにだってたどり着ける、光より速く進めば。

時恵 (指で文字をたどりながら、ノートを読み上げる) その力がある、ぼくたちは。どこにだってたどり着ける。

二反田 (ノートを読み上げる) そんなのはうそだ。光より速く進めない。わたしたちは人間だから。

桜丘 続きは？

期待に満ちた目で三谷を見る。

小熊 そこまでになさい、あなた方。いいですか……、

三谷 かつ……、かつ、駈けだすんだ！

桜丘 お？

三谷 駈けだすんだ！ 胸の奥に石を投げこむんだ！ その石が揺れるんだ、きみが足を踏みだすたびに！

小熊 三谷くん？

三谷 石が揺れるんだ、カラカラと音を立てて、転がり続けるんだ、それが星になる、星が走る、星が落ちる、星が燃える、光を放つ。ぼくたちの胸の石が、光を放つ！ ぼくたちの心が！ 光をこえて！ 彼方へと進む！

短い沈黙。四宮が拍手をする。しだいに拍手が広がる。

桜丘 響いたぜ。

三谷 ……おう。

二反田 やっぱり抜群に狂ってんじゃねえか、三谷氏よオ。(背をたたく)

三谷 いや、その、痛い。

桜丘 走るか。

三谷 は？

桜丘 ずいぶんさぼっちゃまったから、朝練。

三谷 いま？

二反田 よし来た。(柔軟をしながら) 石が揺れるんだ、カラカラと音を立てて、転がり続けるんだ。

三谷 ちよっと！

二反田 絶好調！

二反田が駆けだす。遅れてはならじと、

桜丘 行くぞ。星が走る、星が落ちる、星が燃える……。

三谷 やめてよ！

桜丘 光を放つ。ぼくたちの胸の石が……、

三谷 桜丘ア！

駆けだしていく桜丘を三谷が追いかける。

時恵 行こっか、悠里。

悠里 行ってみるか。(教室中を見わたして) ほら、おまえらも。行こうぜ。

船見 おれらも？

岸边 いく？

島貫 ここにいたって、しかたないし。

連れだって教室を出ていく人々。取り残された小熊を北斗が見る。

小熊 勝手すぎます。みんな。みんな。みんな！

北斗 いいんじゃない、好きにやれば。

小熊 能天気な！

北斗 しかたないよ。

小熊 おかしいです、おかしいです、おかしくありませんか？ おかしいです、ぜったい。変だよ。でたらめだ。

北斗 小熊さん？

小熊 わたしですか、おかしいのは!?

北斗 そうじゃないけど。

小熊 きらいだ！ きらいだ！ みんな、きらいだ！

北斗 いいぞ。

小熊 ……。

北斗 いいぞ、小熊さん。とてもいいぞ。

小熊 うるさい！

北斗 その調子！

小熊 ばかにしないで！

北斗 してねえから！

小熊 うるさい！ ばか！

北斗 言ったな！（バケツいっぱい落ち葉をかける）

小熊 やめろオ！

北斗 ばかって言ったほうがばかだよ！

小熊 どの時もこいつも！ なんなんだ、いったい！ 異世界人どころか、わたしたちは、人類どうし言葉が通じていないじゃないですか！ けものだよ、あいつら！ わたしも！ わたしが！ 吠えて、うなつて、絶望して勝手に、口のなかににがいものがあふれて、飲みこめなくて、ばかですよ、わたし、そうです、わたしがばかです。いつか飲みこめる日も来るのでしょうか、きつとそうなのでしょうが、わたしは、わたしはいやだ、走りたくない、こわいんだ、それもちがう、うまく言えない、言えない、どうして？ この胸のこの色は、消えてなくなるこの気持ち、いつかあとかたもなく記憶からこぼれるこの痛みは、口のねばつき、そのにがさ、どれもちがう、言えない！ 言えない！ 言えない！ 言葉だけが追いつかない、こんな不完全なものだけを手にして、わたしたちは生きていかなければいけないのですか。ままならない人生！（足を踏み鳴らす）

四宮 それが文学！

北斗 は？

小熊 はあ？ あなた、な、なんなんですか！

四宮 つばさがよみがえったね、言葉に。

小熊 うるさいこのやろうだまりなさい。

四宮 羽ばたいてるね。

小熊 わけのわからないことをこの女。

四宮 ばーか。

小熊 はあああああ？

四宮 ばーか、ばーか！

北斗 言われてるよ！

小熊 泣きますよ！

四宮 泣けよ。

小熊 (片手を大きく振りあげて) 張り手食らわす。

北斗 (笑って) なに言ってるの？

駈けだしていく四宮、追いかける小熊、笑い転げる北斗。北斗も小熊の標的になり、もつれあうようにして駈けだしていく。

何度も走りすぎていく杉谷と松本。「止まって！止まって！」「むり！」。

何度も走りすぎていく桜丘と三谷。「おせえぞ三谷」、「うるせえ」。

三谷が歯を食いしばって走る。桜丘を一瞬、抜くかもしれない。だが二反田がそれを追い越す。「えええええ？」。「光を超えらんだろ、三谷氏！」「ちくしょおおおおお」。

何度も走りすぎていく四宮と小熊と北斗。「ばーか！」「待ちなさい！」「待たない！」「いいぞ！」。

何度も走りすぎていく悠里と時恵、船見と島貫と岸辺。大笑いしている。「おまえら、走り方、変じゃね？」「ど、どこ

がア?」「それが!」「シユインシユインシユイン!」「プウーン!」「キーン!」「男子」「くっそ男子」。

教室に残った山羊沢が、

山羊沢 蟹江、蟹江、蟹江。

蟹江 ……起きてるよ。

山羊沢 これ、夢か?

蟹江 どうだか。

山羊沢 (自分の頬を引っ張り) 目が覚めたら、帰れるかな。

蟹江 何度も、こんなことをくり返した気がする。

山羊沢 え?

蟹江 目を覚ますたび、忘れてしまう。何度も、何度も、何度も。

山羊沢 ……なに泣いてるんだよ。

蟹江 べつに。

山羊沢 世界が終わるから?

蟹江 そうだね。

山羊沢 じゃ、はじめようぜ、世界。

蟹江 ……どうやって?

山羊沢 約束をしよう。おれたちは海へ行く。二人で。

蟹江 わたしたちは、海へ行く。二人で。

山羊沢 目が覚めても、覚えている、ぜつたい。

蟹江 そんなの、わかんないよ。

山羊沢 覚えていてよ。

蟹江 できるかな。

山羊沢 おれは覚えてるよ。約束。

蟹江 ……うん。

山羊沢が蟹江の手を取る。

彼らのまわりを人々が走っていく。

やがて周囲に溶けこむように、走りだす二人。

8

森。

梅田と波江が小走りで行く。

波江 足が速いんだね、梅田さんは。

梅田 この場合って、波江さんの体力のなさが問題だよ。

波江 もう時間がない。

梅田 そうだよ、がんばって。もうちょっと。

波江が立ち止まる。

梅田 (気づき) どうしたの。……え、置いていくよ。

波江 梅田さんは、味方になると言ってくれた。

梅田 うん。いや、それとこれとは、

波江 ぼくも守るよ。この世界を。

梅田 なに？

波江 信じて。

霧崎、雨ヶ谷、雪村、雷音寺、嵐山がそこにやってくる。

霧崎 おはよう。

口々に「おはよう」を唱える者たち。

梅田 え? ……おはよう。

霧崎 梅田さん。(波江を指さして) そいつから離れて。

梅田 なんぞ？

霧崎 そいつが通り魔だよ。

雨ヶ谷 (挙手をして) 見たんだよ、わたし。見た。

雪村 (波江を示して) そいつが人を刺しているの、見たんだって。

梅田 波江くんが？

嵐山 人を刺して笑ってた。

雷音寺 離れて、梅田さん。

梅田 どういうこと？

波江 信じないで。

霧崎 (波江を制して、地を揺るがすような声で) 離れろ。

波江 ……。

霧崎 離れろ、おまえ。

雷音寺 ひどいやつだ。

嵐山 この世の悪。

雪村 最低。

雨ヶ谷 うすよごれた心。

霧崎 来て。梅田さん。

梅田 波江くん、通り魔なの？

波江 ちがう。

かすかに波音が聞こえる。

霧崎 教室中が血の海。

雷音寺 こいつのせいで。

嵐山 こいつが。

雪村 波江。

雨ヶ谷 波江が。

霧崎 刺してまわった、みんなを。止められなかった。みんな刺された。

雷音寺 一撃で。

嵐山 顔のかたちもわからないほど、何度も。

雪村 髪の毛をひつつかんで。

雨ヶ谷 口をふさいで、歯を砕いて。

霧崎 何度も顔面を机に打ちつけた。

雷音寺 波江。

嵐山 波江。

霧崎、雪村、雨ヶ谷 (声をそろえて) 波江。

沈黙。

梅田 (波江を見て) え？

波江 (霧崎たちに) きみたちは、ぼくを追ってやってきた、はるかな先の未来から。梅田さんとぼくの接触をなかったものにするために。未来の人間の手によって生みだされた人工知能。そうだね？

霧崎 何を言っているの、こいつ。

雷音寺 いかれていやがる。

嵐山 こわいよ。

雪村 こわいね。

雨ヶ谷 こわい。

霧崎 梅田さん、行くよ。

雷音寺 変だから。

嵐山 変だから、こいつ。

雪村 変。

雨ヶ谷 行こう。

梅田 あのさ。

全員が梅田を見る。

梅田 走ってるけど、みんな？

梅田の指さす先から、人々が走ってくる。

杉谷 うおい、力尽きるなよ！

松本 杉谷、置いて行っていいから……。

杉谷 走れ、走れ、走れ、こんなもんじゃないだろ、わたしたちは？

松本 休ませて。友達だろ。

杉谷 友達イ？

松本 ちがうの？

杉谷 友達とか！

走り去っていく二人。そして駆け込んでくる船見、島貫、岸边。

船見があらぬ方向に行こうとして、

岸边 どこ行くんだ船見、こっちだよ学校！

船見 そっち？ どっち？

島貫 こっちだっつうの！

船見 あれエ、波江エ？

波江 うん。

岸边 (その場で足踏みをして) 何やってんの、行くぞ、早く。

波江 すぐ追いつくから。

船見 待ってるからな!

島貫 急げよ、発表あるぞ、今日!

走り去っていく三人。そして北斗と小熊が、

北斗 珍しいね、小熊さんが寝坊って。

小熊 口よりも先に足を動かさない、北斗くん!

悠里と時恵が、

悠里 あと何分? あと何分、何分?

時恵 まじくそやばい、空飛びたい!

四宮と二反田と三谷が、

三谷 だからさ、バッチョンビールルルウェットが有力だろ?

四宮 いいえ! ポコン。パランチンスクジエシートこそです。

二反田 何言ってるの、タンタカリドドネズルンムツカでしょうが！

蟹江と山羊沢が、

蟹江 ちよつと放してよ、手！

山羊沢 (つかみあう手を指さして) おまえがつかんだんだろ！

蟹江 あんたでしょ、ばか！(振りほどく)

山羊沢 ちがうって！

そして桜丘が駆け込んでくる。

桜丘 梅田ア。

梅田 桜丘。

桜丘 寝坊だよ。たいへんだよ。大遅刻だよ。

梅田 急ご。

桜丘 おう。

梅田 (行きかけて) 波江くん。

波江 先に行つて。

梅田 うん。

梅田が走りだす。波江が霧崎に向き直り、

波江 この世の果てに閉じ込めて、それで安心していたんだろ。

霧崎 何が言いたい？

波江 ぼくたちは人間を知らない。

霧崎 は？

波江 せつかく、そのからだを持ってここに来たんだ。ぼくたちは知ろう、人の心を。いっしよに学ぼう。
力を合わせて。(手を差しだす)

霧崎 ……。

波江 話はそれからだ。

霧崎 ……うざ！

波江の差しのべた手を奇立たしげにパチンと打ち、霧崎も走っていく。その後を追う人々。

波江がひとり佇み、空の広がりを見上げる。

やがて、駆けだしていく。

そこは教室。杉谷と松本がたどり着き、

杉谷 さっきおまえ、なんて言った？ え？ なんて言った？

松本 うるさいな。

杉谷 何か言いたいことがあるんじゃないのか、わたしに。なあ、なあ、なあ？

松本 (雄々しく) 杉谷。

杉谷 (思わず) はい。

松本 おはよう。

杉谷 ……おはよう。

教室に入ってくる人々。

二反田 おはよう！

四宮 おはようございます、

三谷 おはよう。

杉谷 (迎え受けて) おはよう。

松本 (片手を挙げて) おはよう。

北斗 おはよう。

小熊 おはようございます。

蟹江 おはよう。

山羊沢 おはよ、

悠里 おはよう。

時恵 おはよ、おはよ、おはよつす。

船見 おはよう。

島貫 おはよう。

岸边 おはよう。

波江 おはよう。

桜丘 おはよう。

梅田 おはよう。

梅田の「おはよう」に、人々がまた「おはよう」を返す。

ある者は着席し、ある者は教室を歩き交う。

素知らぬ顔で霧崎たちも「おはよう」を言い、席に座る。

二反田 (着席し) うふーっ、間に合ったア！

四宮 なんか、すごく長い登校だった気がする。

二反田 ぜえぜえがヒーハーですよ、あせあせ。(額を小粋にぬぐう)

山羊沢の席に座った蟹江に、

山羊沢 だから、そこおれの席だつて！

蟹江 なんだ、つまらないことでいちいち、おまえは。

山羊沢 んもう……。 (蟹江の前の席に座る)

北斗 小熊さん、あの抜け道、よかったでしょ？

小熊 くもの巣にまみれたんですけど？

時恵 だから桜丘、足じゃま！

桜丘 わり。大変なんだからね、長すぎるのも。

梅田 二反田、世界史やろ、一瞬でも。

二反田 オツケー、ちよい待ち、呼吸ととのえる。

岸边 (ノートで自分をおおぎながら) 波江、昨日なんでいなくなったの？

波江 うん、なんか、迷った。

船見 え、通学路で？

島貫 波江もはや赤ちゃんだろ。

波江 わからないことばっかりだよ、この世界は。

三谷がノートに何かを書き始める。

杉谷が松本の席を後ろから蹴る。

梅田と桜丘があくびをする。

小熊が予習をはじめ。北斗が忘れ物に気づく。

波江が英単語帳をめくる。船見、島貫、岸边が脳内で妄想をはじめ。

四宮と二反田がこっそりと笑う。

山羊沢が蟹江をふり返る。

蟹江 なんだよ。

山羊沢 いつ行く、海。

蟹江 は？

山羊沢 覚えてるから、おれ。

蟹江 しらない。

山羊沢 顔赤くね？

蟹江 赤くないだろ、肌色だろ。

窓の外を眺める悠里が、

悠里 一生分、走ったわ。

時恵 げろ出そう、げろ。

悠里 今日も青いね、空が。人の気も知らないで。

と、教師がやってきたのだろうか、慌ただしく居すまいを正す人々。

学級委員の小熊が、

小熊 起立。礼。着席。

ふっと暗闇がおりる。

主な参照

『漂流教室』 榎岡かずお

幕。